明治三十一年二月廿六日郵便物認可第三種郵便物認可

求道第一卷第五號

目次

◎宗教最高の理想及び是より來たる人生觀　《社說》　楠龍造
◎迦膩色迦王　菊池秀言
◎本間光丘傳
◎光に觸るゝものは安慰を得べし　近角常觀
◎佛教の戰爭觀　上杉文秀
◎苦悶の人に與ふる書　近角常觀
◎無題錄　鈴木卓苗
◎報謝の一念　百目木劍虹
◎修養とは自己の態度を定むること也　求道學人
◎南村閑話　一記者
◎北窓隨筆　風尙餘韻　三日齋
◎新世帶　それがし
◎釋尊の降誕　道交會
◎憂愁　琴風生
◎夏の句　夢弦
▲新刊紹介　政教時報
◎日曜講話◎第二求道會◎編輯餘錄

日曜講話

毎日曜午前九時より木郷森川町一、求道學會に於て

土曜講話

毎土曜日午後二時より九段佛教倶樂部內第二求道會に於て

求道
第一卷
第五號

宗教最高の理想及び是より來たる人生觀

菩提樹下の曉、世尊初めて涅槃を得玉ひし時、恰も明星燦として東天に輝けり。沙羅雙樹の下、如來長へに涅槃の雲に隱れ玉ひしの後、夕陽西に傾きて、靈鷲山頭覺月明らかなり。同じく是れ涅槃の靈境、何そ其趣を異にするの甚しきや。

吾人現世の見地に立ちて此等の靈境に對する感想を披瀝せむか。前者の希望を以て滿たされたる、後者の悲哀を以て沈めるに似ず。看よ世尊成道の日、天樂空に響き、妙華紛々たり、旗幟四方に翻り盲者は明を得、聾者聽を開き、諸天讃美の歌を奏す。之に反して如來滅を示し玉ひしの時、天地暗澹として、山動き、地震ひ、樹枯れ、花萎み、人天號泣して河水猶流を止む、況むや我等如來の遺弟たるもの親しく無明長夜の法燈を仰ぎ奉るに由なし。悲泣何そ堪へむ、然れども此の如きは是れ現世衆生の見地より仰ぎ奉るの言のみ、若し夫れ如來涅槃の靈境より之を見玉はむか、何ぞ知らむ前者は猶是れ有餘の涅槃のみ、後者に至りては洵に是無餘の涅槃、眞解脫の靈境なる者。蓋し是れ宗教崇高の理想、諸佛如來の還歸し玉ひし所にして、亦諸佛如來の來生し玉ふの妙境界たらずむばあらず。

想ひ見る、釋尊入滅し玉ふの時、中夜寂然として聲なく、徐ろに阿難陀を顧みて大涅槃を說きて言はく、如來は常住にして變易あることなしと。嗚呼是れ吾人が最高の理想、宗教の極所なるもの、八萬四千の門戶、此堂奧に到りて初めて頂點に達したりと謂つべきか。

極樂淨土は實に彼の無爲涅槃界也、吾人佛陀の慈光に接して、攝取の聖懷に抱かるゝ者、此穢土の肉身を捨てたるの時初めて達し得べき崇高の靈境也。宗敎最後の理想、此に至りて初めて實現し得たりと謂つべきか。吾人は白狀す、吾人は極樂淨土の靈境を聞くこと久し、然れども猶現世光明中の生活に重きを置きて、死後の樂土を欣求するの念乏しかりき。今にして之を想ふ、洵に是れ淺薄なる信念、沈痛深遠の趣を備へず。謂ふ事を止めよ、極樂淨土の思想は厭世的氣風を鼓吹するの奬ありと。宗敎は固より現世の生活に便宜なる慰藉を目的とするにのみ非る也、蓋し宗敎の理想は此穢土を厭離し、彼淨土を欣求するに至りて眞個の極所に達する者、彼涅槃の靈境を此現世に求め得べからずと斷定して、未來淨土に至りてのみ實現し得べしと確信する者、蓋し宗敎の最も高妙なる至極を顯現すと謂つべき也。古聖嘆じて曰く、戒行慧解ともになしといへども、彌陀の願船に乘じて生死の苦海をわたり、報土のさしにつきぬるものならば、煩惱の黑雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへと。

吾人は此の如き肉の穢身を具へ、此の如き煩惱の心を有する已上は、徹頭徹尾眞個涅槃の靈境を伺ふことを得べからざる也。蓋し吾人が胸中に宿り玉へる大信心は、直ちに之れ佛性にして、佛性亦是如來なりと雖、猶此肉の身に寓し、煩惱の雲に蔽はるゝ已上は、決して理想の境に達せるものと謂ふべからず、何人か厚顏、即身成佛即心是佛を公言し得るものぞ。既に肉の身を有す、食仰がざるべからず、既に人の心を有す、慾起らざるべからず。誰か亦敢て煩惱即菩提、生死即涅槃を絶叫する者ぞ。菩提の花は煩惱の風雨に犯され、涅槃の月亦生死の雲に蔽はる、古聖賢自力の爲すなきを嘆ずる洵に故ある哉。

嗚呼此の如き不完全の人生、此の如き五十年の浮生、吾人汲々として勉むるも亦如何程の事を爲し得む。唯佛力を恃みて其牽く所に任するに非ずむば亦如何ともすべからず、既に絶對に自己の無能力を自覺す、豈全然運命を他力に委ねざるべけむや。既に吾人自ら救ふ能はず、何ぞ亦人を救ふの能あらむ、唯信仰の餘、彼佛陀の慈悲を傳へて、共に如來の御弟子として同朋同行たらむのみ、何ぞ人に對して慈悲を行ふの力ありと言はむや。若し少しく慈惠を行ひたりと假定せよ、僅かなる人生に於て聊かなる事を行ふ、何ぞ敢て臆面もなく之を慈悲と稱することを得む。理想の慈悲は未來淨土に達したる後にあり、現實の不

完全を知るの深きは理想を眺むること頗る崇高なればなり、自力の爲すなきを知るは他力の力强きを悟れるなり、今生に於て達し得へからさることは盡く來世に於て滿足せしめ玉ふ也。古賢所信を告白して曰く、淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふがことく衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のことくたすけがたければ、この慈悲始終なし、しかれは念佛まうすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にさふらふべきと。

言ふ勿れ、自己をみること卑ふして小なりと、自ら見る卑きものは必す高遠なる或者を仰望して止まざる也。自ら評價するの小なるものは必す偉大なる眞價を抱けるものに外ならざる也。暗澹たる人生、前途星光の爛くあり、豈無明の長途に疲れむや。吾人が此身に於て達し得べきが如き理想を有するは却て是れ希望の卑しきを示すもの也。吾人が此世に於て行ひ得るの行爲に滿足するが如きは、未だ向上の態度眞摯なりと謂ふべからざる也。征人首を回らして來れるの遠きを誇る時は、既に佇立筇を停めて歩行を怠るの時なりき。自己の罪惡を自覺するの深きものは、自己の罪惡を告白するの勇氣を有す。現世の價値を悟了するものは現世に避け得べからざる缺點を粉飾するの醜を爲さむや。人間は飽まで人間也、外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ內に虛假を懷けばなり。倩々煩惱の無盡藏なるに驚くの時は、如何に佛陀の光明の無限なるかを嘆する所以なり。人間の價値は此の如きものなりけりと悟了するの時は、佛陀の世界が如何に廣廓たるかを觀するの時なりけり。雲間に洩れ出づる月影の如何に淸らかにして且つ明らかなるや。然りと雖、吾人が萬里靑碧一片の雲を止めさる法性の覺月を眺めむと欲せば吾人は他迄煩惱の黑雲を拂はざるべからず、他迄煩惱の羈絆を脫せむと欲せば全然肉の穢身を脫せざるべからず。吾人眞解脫の境を死後の樂土に求むる者洵に故ある哉而して猶死の關門の來るを欣はず、何ぞ其撞着の甚しき。蓋し煩惱の纏綿繫縛する無窮と謂つべき哉。

首を回らして吾人の過去を顧る、曠劫已來、輪廻轉生して環の端なきが如し。今生の父母妻子、現在の師弟朋友、何れの世よりして因緣を結び來りたる結果なるや知るべからず、一點の怨は展轉して後世の大惡を釀し、一片の恩愛は永劫の執着を招く。釋尊屢々法を說くに、遠く過去の本生譚を語りて、善惡の所作必す其由て來ること深きを示し、吾人生死海に沈溺するの

長さを諭し玉ふ、吾人善を行ふ。自ら以爲らく、我善を爲し得たりと何ぞ知らむ、是れ爲すべきの原因ありて然るものたるを。亦吾人惡を爲す、過去の宿業、避けむと欲して避くべからざるものなきを保せむや。先哲曰く、卯毛、羊毛のさきに居る塵ばかりも、作る罪の宿業に非すと云ふことなしと、嗚呼何ぞ其由て來ることの遠くして且つ久しきや、一樹の蔭、一流の水、皆是れ過去永劫の古より生々世々の芳契にあらざるはなし、而して今や吾人無爲涅槃の極樂界中に往生して、眞如法性の身を證せば、此の如き曠劫輪轉の結句に到着する者、吾人死を樂しむべき筈にして所謂苦惱の舊里に纏綿たる所以のもの豈其理なからむや。

吾人は此の如く生死海に流轉せり、此の如く無明の中に彷徨せり。而して今や幸に此の如く無明長夜の燈炬に遇ひ奉り、生死大海の船筏に乘することを得たり、實に是れ盲龜の浮木に逢へるが如し。聖人深く感泣して曰く、噫弘誓の強緣は多生にも遇ひ難く、眞實の行信は億劫にも得難し、偶々行信を得ば遠く宿緣を喜べと。吾人亦同歡、同喜、感謝の涙に堪へざらむや。恰も是れ百川の相集りて大海に朝宗するが如く、吾人何等の幸か相師ゐて不可思議の願海に歸入するを得たり、四河海に入りて同一の鹹味たり、何ぞ其流の清と濁とを問はむ、水清さが爲めに海水の清を加へず、又水濁れるが爲めに大海の之を辭するを聽かざるなり。本願を信ぜんには他の善も要に非ず、念佛に優るべき善なきが故に、惡をも恐るべからず、本願を妨ぐるの善なきが故に、且つ夫れ吾人の稱して善と稱するもの果して絕對の善なるか、世上の稱して惡と稱するもの眞個に罪惡たるや否やを知るべからず、聖人の仰せには善惡の二つ、總じて以て存知せざるなり、其故は如來の御心に善しと思召す程に知り通したらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと思召す程に知り通したらばこそ、惡しさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、萬つの事、皆以てそらごと、たはごと、まことあることなきに、唯念佛のみぞ、まことにておはしますとこそ仰せ候ひしか、嗚呼虛僞の世界也、罪惡の世界也、吾人の眼中唯念佛無碍の一道あるのみ、

華嚴經に曰く、十方無碍人一道より生死を出て玉へり、一道とは一無碍道也、生死即ち涅槃と知るなりと。涅槃經に曰く、大信心は佛性なり、佛性は即ち如來也と。嗚呼念佛無碍の一道は生死海を一轉して極樂無爲涅槃界に導き玉ふなり、他力信心の

佛性は吾人罪惡の凡夫を開發して如來慈父の膝下に往生せしめ玉ふ也。吾人稱して往生といふ、然れども是所謂無生の生なるもの、曉鐘一たび響きて長夜の宿夢忽ち破れ、千古醒覺の靈境に遊ぶが如けむのみ。洵に是れ宗敎の極致、人生最高の理想也。經に此境を描きて曰く、顏貌端正にして世に超へて希有なり、容色微妙にして、天に非す、人に非す、皆自然虛無の身、無極の體を受くと、何ぞ莊嚴淸淨にして和樂高潔なる。吾人の慈親も此中に在せり、吾人の恩師も其境に入り玉へり、兄弟姉妹、妻子朋友、永劫の間、相親しみ相愛せし者俱に一處に會して、修行安心の居宅に住し、愛樂法味の屋寓に飽きて、再び生死の園、煩惱の林に遊戲し、始めて理想的救濟の大慈悲を實現する事を得べき也、嗚呼現世此の如く想像するだも猶是れ夢中の現象ならくのみ。冀くは長へに如來大覺の召喚を仰きて、臨終一念の夕、法性の覺月速かに現はれて、盡十方無碍の光明に一味たるの時大般涅槃の眞實證に入らん哉。

* * *

大般涅槃の眞實證は吾人最高の理想、宗敎の最後たると同時に宗敎の最初なり、本師法王の如來も此境より來り玉へり、迦耶の釋尊も此境より現はれ玉へり、三世の諸佛も此境より來生し玉へり、十方の薩埵も此境より示現し玉へり、有緣の知識も此境より化し玉へり、同行の親友も此境より伴ひ玉へり。此に至りて人生なる者は皆吾人をして涅槃大覺の本城に還らしむるの一大行路たらざるはなし。此に於てや彼の穢れたる者何ぞ知らむ是淸淨を莊嚴する所以にして、彼の惡しきもの却て善を顯現する所以にあらざるなきを知らむや、此の如く涅槃眞證の靈境より反射し來る光明は吾人人生をして善化し、美化し、靈化し盡さずむば止まざらむとす、噫、言語此に絕へて吾人は古聖讃美の曲を誦して止まむのみ。

* * *

無明の大夜をあはれみて
法身の光輪きはもなく
無碍光佛としめしてぞ
安養界に影現する

久遠實成阿彌陀佛
五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛としめしてぞ
迦耶城には應現する

如來すなはち涅槃なり
涅槃を佛性となづけたり
凡地にしてはさとられず
安養にいたりて證すべし

信心よろこぶそのひとを
如來とひとしとときたまふ
大信心は佛性なり
佛性すなはち如來なり

＊　＊　＊　＊

觀音勢至もろともに
慈光世界を照曜し
有緣を度してしばらくも
休息あることなかりけり

安樂淨土にいたるひと
五濁惡世にかへりては
釋迦牟尼佛のごとくにて
利益衆生はきはもなし

智慧光のちからより
本師源空あらはれて
淨土眞宗をひらきつゝ
選擇本願のべたまふ

敎世觀音大菩薩
聖德皇と示現して
多々のごとくすてずして
阿摩のごとくにそひたまふ

＊　＊　＊　＊

無慚無愧のこの身にて
まことのこゝろはなけれども
彌陀圓向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ

小慈小悲もなき身にて
有情利益はおもふまゝ
如來の願船いまさずは
苦海をいかでかわたるべき

罪業もとよりかたちなし
妄想顚倒のなせるなり
心性もとよりきよけれど
この世はまことのひとぞなき

よしあしの文字もしらぬひとはみな
まことのこゝろなりけるを
善惡の字しりがほは
おほそらごとのかたちなり

迦膩色迦王

楠　龍　造

一

我は藏經中に散見せる迦王(Kaniska)の小話を蒐集し、幾何なりとも佛敎に大關係ある迦王の人物の如何なりしやを一瞥せんと企圖するもの也、迦王の年代に關してはマクス、ミュラーはA.D.85106の人なりと云ひラッセンは紀元前一世紀の人なりと云ひ、プリンセプは紀元後一世紀の人なりと云ひ、カンニングハムは58A.D.なりと云ひ、リス、ダビヅは10A.D.なりと云ふ、『西域記』二(致七十一)には佛滅四百年出世と云ひ、松本博士は『佛典結集』に於て紀元後三世紀の末葉より四世紀の初期の人なりと云ふ、生國は『付法藏傳』五(藏九百五には)月氏國(Yüeh chih)王と云ひ、『馬鳴傳』(藏九百十二)には北天竺小月氏國王と云ふ。

迦王始め贍部州に君臨するや、罪福の理を信ぜず常に佛敎を毀謗しぬ、一日山林に遊獵を試み白兎の走るをみて自ら之を追ふ、忽然として踪迹を失し唯た樹下に牧童ありて小率堵坡をつくるをみる、王之に問ふて曰く何事をなすや、牧童答て云へらく釋迦佛昔懸記して云ふ、國王あり此勝地に率堵坡を立てんと、我今多く舍利を集めたり、王願くば率堵坡を作り宿福を空くする勿れと云ふて見へずなりにき、王大に大聖の先記あるを喜び厚く佛敎に歸するに至り、大率堵坡を作り牧童の作るものに超過せしめんとつとむ、されど功終れば小率堵坡依然として一隅にあらはる、王退て嘆して云ふ、「嗟ろ、人事迷ひ易く神功掩ひ難し、靈聖扶くる所憤怒何んぞ及ばん」と、悲懼咎を謝して歸る、此の率堵坡は玄奘三藏在天の時健馱羅國(Gandhara)に存在せりと云ふ。(西域記二致七十一)

迦王の御宇勢威赫々たり、河西蕃維威を畏れて質を送るに至りぬ、迦王厚く質子を待遇し三時館を易へ四兵以て之を警衛しき、北印度の境至那僕底國(唐に漢封と云ふ)の名は是より得たるものなり、至那僕底國は冬時質子の居りし所なり、此土もと梨桃なかりしに質子始て之を植たれば桃を呼んで至那儞(唐に漢持來と云)と云ひ梨を呼んで那羅闍弗咀羅(唐に漢王子と云ふ)と云ふ、此國人深く東土を敬し相語らく我先王の本國なりと。(西域記四致七十九)

馬鳴論師(Asuaghosha)中印度に入り富那舍(Purnayaca)に遇ひ、「世諦假に名けて我となす、第一義諦は悉く空寂なり、是の如く推求するに我何んぞ得べき」の深理をきさて遂に其弟子となりぬ、かくて中印度に止まり盛に佛敎を宣揚し、殊に摩訶陀國華氏城にありては『賴吒和羅曲』を作り鐘鼓に和し苦空无常の旨を歌ひしかば、五百の王子は感激して其弟子となりにき、思ふに其後のことならん、迦王大兵を引率して中印度を圍む、時を經る久くして勝敗決せず、中印度牛使を發して云く、「求むる所あらば與ふべし、何んすれぞ人民を塗炭に苦しむるそれ甚しきや」と、迦王云く、「三億金を送らばまさに圍を解いて去るべし」、中印度王云く、「一國をあぐるも一億金だにも得ず、如何ぞ三億金を調達するを得んや」、迦王云く、「馬鳴あり佛鉢あり慈心雞あり、これ三億金に當るに足る

宜く之を送るべし」、中印度王之を聞て此國の重寶を他國に送るに忍びず躊躇して決せず、馬鳴論師即ち王に說て云く、「佛敎の意一切衆生を救ふにあり、我小月氏國に至るまた衆生敎化の一方便なり、何んぞ惜むに足んや」と、中印度王已むを得ずして之に從ふ、馬鳴即ち小月氏國に至り盛に佛敎を宣揚せりと。(付法藏傳、馬鳴菩薩傳)

迦王は三億金の代償として馬鳴、佛鉢を得て歸ると云ふ如きより見れば、王は唯に攻伐これ事とする武骨一偏の無情漢にあらで、中心奥ゆかしき思想ある人たるを見るに足らん。

二

迦王大功德あり大願を起し、泥團を塔上におき誓を立てゝ云ふ、我若し來世佛に遇ひ成佛するを得ば泥團變じて佛像となれと、條忽にして佛像に變じ狀貌の微妙描けるに似たりと王後時外に出で路傍に塔を見て佛塔なりとして慇懃に燒香散華しぬ、偈を讃して云く、

具足一切智。　斷除欲煩惱。　衆仙最勝尊。
名稱遍三界。　解脫離所有。　哀愍群萌類。
所說成眞諦。　能傾邪論幢。　是故我今者。
頂禮應供尊。

寶塔忽然分散崩落せしかば、迦王大に恐れこれ我の福德まさに盡きんとするには非るか、王位を失墜せんとするにはあらざるか、何ぞ故なくして此寶塔のくづるるや、人あり語てこれ佛塔にあらで外道の塔なり、されば福德の大王の供養を受くる資格なくして此處に至りしならんと、塔下をあばくに果然尼乾子の屍を得たりと。(付法藏傳藏九、百五丁及び馬鳴の著述『大莊嚴經第六』)

迦王機務の余暇佛僧を引て法を談するを以て樂となしぬ、各僧云ふ所同じからず王大に惑ふ、王一曰脇(Parsva)尊者に之を問ふ、尊者答て云へらく、「如來世を去り歲月逾邈たり、弟子部執師資異論あり、各聞見に據りて共に矛盾をなすと」、王聞て悲嘆やや久しく大法を紹隆せんがため部執に隨て三藏を釋せよと、尊者の云く「大王もと善本を殖て多く福祐に資す、情を佛法に留むるはこれ願ふ所なり」、此處に於て王令して諸國より賢哲をあつむ、既にして法を議せんとするにあたりその喧雜を恐れ撰擇の止むべからざるに至りぬ、即ち聖果を證するものは止まり結縛を具するものは去れと、されど猶ほ多きに堪へず、依て無學の人は止まり有學の人を去らしむ、猶ほ未た繁多なり、更に三明を具し六通を備ふるものは住し自余は歸らしむ、更に撰んで內三藏をきはめ外五明に達するものを止め自余は還らしめき、是處に四百九十九人を得たり王本國に於て結集の業をなさしめんと欲せしかども、暑濕を恐れて之を止め、又王舍城の大迦葉結集の石窟に於てせんかとも思ひしなれども、脇尊者等は彼地外道多くして異論紛々、酬對に暇あらざればとて之を止め、衆心の歸する所迦濕彌羅に於て編纂の業を始むることとはなしぬ、王諸羅漢と共に彼地に至りて伽藍を建立し三藏を結集し『毗婆娑論』を作らんとせし時、世友(Vasumitra)尊者入らんとして戶外より衣を納る、衆阿羅漢曰く汝未た結便使除かず入ることなかれと、世友曰く「諸賢法に於て疑はし、佛に代りて化を施し、まさに大義を集め正論を制せんと欲す、我不敏と雖、粗々微言に達し、

三藏の玄文、五明の至理、頗るまた沈研して其趣を得たり」と、衆無學果を證せざれば此處に入るる能はずと云ふ、世友曰く無學果を求めず佛果を求むるものなりと、遂に諸德世友を推して上坐となし疑義あれば決を之にとるに至る、五百の賢聖、先づ十万頌の鄔波弟鑠論を作りて素呾纜藏を釋し、次に十万頌の毗奈耶毗婆娑論を作りて奈那藏を釋し、後に十万頌の阿毘達磨毗婆娑論を造り阿毘達磨藏を釋し、凡そ三十万頌六百六十万頌言備に三藏を釋してその完備をきはむ、迦王遂に赤銅を以て鍱となし、論文を鏤寫し石函に赴して率塔坡を立てて中に之を藏む、藥叉神に命して之を守護して出すことなからしむ。(西域記三致七、十六、十七)

迦王の佛敎に功績ある其數固より一二に止まらずと雖、『大毘娑婆論結集』は遠く後世まで大功を及ぼせる一大偉績と云はざるべからず、兎角紛々たる小乘佛敎の敎義は『大毗娑婆論結果』によりて大成の極に到達せるなり。

三

迦王一時群臣に訪問すらく、諸國中尊敬すべき智人ありや否や、群臣曰く達摩密多なるものあり、智慧深遠功德具足せり嘗て南天竺に比丘二人あり、相共に達摩密多を訪ふ、住所に三重窟あり下層に弊衣の醜僧ありて火を燃やし居れり、就て二比丘達氏の住所を訪ふ、彼答らく上窟にありと、進みて上窟に入れば人あり之を諦視せるに先に火を燃せる人なりき、二比丘驚愕して云く、卿何んぞ自ら窟して下賤のことをなすや、達氏云く、「子まさに聽くべし、我れ生死受苦の長遠を思ふ、若し頭手をして燃すことを得べからしめば、我れ衆僧の爲に盡く之を燃すべし、況んや唯た火を燃すことおや」と、二比丘之をきゝ生死无量の苦患を思ひ須陀洹果を得たりと、迦王、達氏に遇はんと欲して駕を命じて罽賓山中に行く、達氏弊衣垢顏之に接せんとせしに弟子誡むらく、大王は尊嚴なり宜く淨服を着すべしと、達氏曰く、「如來は豪貴を見れば即ち莊嚴せよと云はず、弊服は出家の常なり」と、かくして平然迦王に面會しぬ、迦王恭敬尤もつとむ、達氏唾を吐き王に之を棄てしむ、王其命の如くしき、達氏また王に云く、我れ王の供養をうくるに堪るや否や、王唯々として首肯す、達氏云く、「王昔嘗て勝道より來る、今還て本路より去るべし」と、王即ち國に歸る、群臣喜びずして云く、わざ〳〵勝人を尋ね一事だも諮問するなく徒手歸るは何ぞや、王云く我大海をうく我の今日ある宿昔勝業を積みしによる、今世また勝業をつまざるべからざるの敎を受くと、迦王また嘗て途中五百の乞人に遇ひ厚く恩惠を施しぬ、一臣天法いぶしみて其故を問ふ、王曰く、我今日ある宿福による、若し今日仁をなさざればいつぐんぞ來世乞人たらざるを得んやと」(付法藏傳藏九百六)

主角淩々たる達摩密多の衆動に對して、已を空うして其敎誨をうけたるは、寬容大度いかしきかぎりと云ふべし。

安息國王、性暴頑にして迦王を攻伐せんと欲す、兩軍兵を交へ迦王大勝を得て敵人九億を殺害しぬ、王群臣に問ふて曰く此罪滅すべきや否や、群臣曰く殺人は重罪なり決して滅することなけんと、王即ち大釜に熱湯をみなぎらし一金環を投して云く、汝群臣方便して之をとれよ、一臣あり冷水を加へて之をとるに手傷爛する所なし、王曰く我の罪を作るは熱湯

の近くべからざる如し、されど懺悔修德は冷水を加ふるが如し、何んぞ罪滅せざらんや、我九億を殺す中尤も重き罪二人半あり、此故は二人殺さるるに臨み南無佛と稱し、一人は南無とのみ稱して殺さると、馬鳴迦王のため說法して懺悔修德せしめにけり(雜寶藏經第七付法藏傳)

迦王に三達人あり、一は馬鳴なり、一は名醫遮靺(雜寶藏經には摩吒羅と云ふ)なり、一は大臣摩喧羅(雜寶藏經には摩吒羅と云ふ)なり、王は遮靺によりて疾病をよくし摩喝羅によりて諸國を征伐せり、されどあはれむべし迦王征伐際限なきにより臣民之に苦しみ、王の病癒の時被具を以て之を壓し上に坐して窒息して死せしむ。(雜寶藏經、付法藏傳)

英雄の末路みなあはれむべし、殊に印度に於て然り、中印度の盟主阿闍世王は其子優陀那跋陀羅の弑する所となる、世界の英主阿育王は死に臨んで我自由にし得べきもの半阿摩勒果のみと叫んで死しにき、今迦王の死またあはれむべきなり、されど彼等は幸にして佛陀の敎法をきけるため、又尋常人の得べからざるいかしき長所ありしを忘却すべからざる也。

* * * * * *

羽後酒田　**本間光丘傳**

近時成功を叫ふの聲漸く多くして而も其成功するの原因を窮めず、故に之を欲望する者愈よ多くして其行路を惑る者亦愈よ多し。或は投機的生活を爲て僥倖を萬一に希及し、或は冒險的生活を爲て產業を治めず、前者は非常の好運兒に於て初めて萬一を僥倖することを得へく、後者は異常の人傑に於て稍其目的を達すへきなり、宜哉破業倒產多くは詐僞的行爲に陷り終に刑餘の人となるに至る、夫れ摯實なる自信は根本なり、適切なる行爲は枝葉なり、正確なる成功は結果なり、摯實なる自信力に乏くして謹勉耐忍敏活等の適切なる行爲を完くする者は希なり、謹勉耐忍敏活等の要素を完くせずして正確なる成功を收むる者は未た之あらざるなり、然り而して摯實なる自信力は宗敎に依て安立するもの其地盤最も鞏固にして、毀譽褒貶の爲に移動せられざるなり、世人往往成功を欲望するの念急遽にして之を正確なる實驗に徵せず、故に縱令一時は其目的を達するか如きも永久に保持すること難からん、本篇本間光丘の如きは一世の事業皆な敦く佛敎を信仰し神祇を崇拜するの餘力より出て、身を修め家を齊ひ藩政困頓の財務を整理し、殖產に興業に慈善に公共に心力を貢獻して而も其富東北の具膽する所となり、且家憲正確現今に至て益々謙抑の德を守り篤實の美風を存し家道更に隆昌なるもの、豈成功を希望する者の好模範にあらずや、茲に其略傳を叙して併て道を求め信仰を求る者の參考に供す。

菊池秀言記

廿七年五月

本間光丘は意思鞏固にして頗る進取の氣に富む、故に一ひ決斷して事業に着手するや、堅忍不撓にして幾多の艱難又は障碍に邁遇するも敢て之を辭せざるの概あり、而も其頭腦頗る周到にして都て十分に觀察の後に非れば進まず、故に其計

畫せる事業幾んど成効せざるものはなかりしと云、而して其半面より之を觀察すれば亦た父祖の薫陶に起因するもの少なからず、顧ふに、初世久四郎光源は敦く佛敎に皈依し、信念確定して死生の問題を悟了し以て處世の道を得たり、平素勤儉家を齊ひ農商の正業を以て產を治め、着々實行して變に應ずるの道も豫め之が計を爲り、且常に以爲く太平の世に生れて安穩に生產を營み、父母に奉養し妻子を撫育するは皆な國恩なり、苟くも產業に餘贏を生せば必らず應分の義を効し萬一を報ぜざる可らずと、每に之を實行して子孫に訓誡し時を以て盡す所あらしむ。

同家の國家奉公に忠實なるは茲に起因す、即ち現に時局問題に對して賞賜の大詔を拜するや、直に五萬圓の軍資を上り、巨額の恤兵金及家族をして常に繃帶木綿を製せしめて屢次之を獻し、每度數十萬圓の國債に應し、其他軍人の家族救護に、又は士氣の鼓揚に全力を傾注し、且つ自ら勤勉節約して耐久の思想を養成せり、

第二世正五郎光壽、資性篤實にして至孝、衆に挺て屢藩主の資用を調達し、寛延二年三月乃父の志を繼て米千二百俵を献す、此賞として初て稟米七十俵宛を下附せらる、乃て此を以て自家の尺寸を延すを潔しとせず、直ちに六十俵宛を郡代所に預けて元利を貯蓄し邦家緩急の需要に供せしむ、其後二十二年を經て、三世光丘專ら藩政財務を整理するに方て、安永元年二月廿九日江戸大火藩邸烏有に歸す、同四年十五日酒田出火、延燒二千餘戸本間氏邸宅土藏等亦た類燒に罹る、此際藩命に應して二千金を調達し、且羹に郡代所に貯蓄する所の稟米元利併て二千五百俵に更に五百俵を加て三千俵を献納せり、其勤儉貯蓄を實行して公忠公義に盡せしは率ね此類なり。

明和元年三月父祖の遺訓に遵ひ、國恩の萬一を報せんために金千兩を献し、其利子を以て大督寺(藩主の祠堂寺)及ひ城郭修繕費の內へ加えられんことを請ふ、其文に曰く、

乍恐以書付申上候、拙者祖父久四郎存生之砌、親庄五郎へ申聞置候者末末身上相應に取廻仕候はゞ、時節を以寸志金差上置乍恐、御金御入用之節一方之御差向にも被成下候樣に可奉願候、其趣旨名名御領所に住居仕安穩に渡世仕罷在候儀、乍恐偏に御國恩之莫大成處朝夕奉忘間敷堅めに候旨吳吳申付置候由、依之十六年以前已來親庄五郎奉願御用米辰納千二百俵差上、猶又祖父遺言之趣委く拙者へ申付置候、併拙者近年相勤候功も無御座候に付、右兩人之者遺言も相違兼年々時節を相伺罷在候程宜方へは參兼、却而末末無覺束奉存候、左候得者右申傳置候筋も無下に罷成候段何程迷惑至極に奉存候間、此節身上不都合之儀に御座候得共此度金寸志金千兩差上申度奉存候、就夫奉願候、乍憚當役所樣御郡代樣御方相談之上右金子へ年々少少之御利息を被下置度奉存候、此御利足金之儀者當時大督寺御普請御足金に被成下、御成就之後者恐乍年々御城內御修覆之御足料に仕度奉存候、右奉願候通被仰付被下置候はゞ冥加至極難有仕合に存奉候、以上

申三月　　木間久四郎

御町奉行所

世人往々本間氏の富を致す原因は米相場に當得たるものと誤解する者あり、何そ知ん空相場は父祖以來の制禁なることを光丘曾て父祖に代り其伯父本間信四郎を訓誡する書を見れは、如何に家道謹嚴にして正經なる業を治めしかは一目瞭然たるものなり、故に其煩を厭はす之を揭く。

今度不慮成火災に付其元居宅類燒被致殘念に令存候依て少分に候得共文金五十兩取換可申候(中略)此金子を以家普請等相成候得者借宅之氣分に相成萬端由斷有間敷事候就夫申遣候、我請繼候處之職分大切に相守致入精候より外に

他事無之候、然處近來御米札賣買致候儀、家柄人柄も無之被成候哉世間之風聞も不宜候（中略）一門之家名を穢し候事先祖（之不忠不過之候、殊に妻子等及迷惑候節に後悔致共落花不歸枝其甲斐無之事に候間、自今以後堅停止歩商（相場を云ふ之儀必至と相止可被申候、兎角先祖敎置候本道を相守り心を安し候樣可被致候、獨我可勤家業之上に而勞働致候儀專一に而冥加も可有之事に候、歩商之事子孫に殘し置候者一度は亡申候事目前に御座候、能々此旨納得可被致候、若し相守不申候はゞ其節一家中へ申談身上引受可申候間前廣に斷置候、向後は急度御慎可被成候、爲其右金子を取替させ各家業令致重石候、久四郎儀猶以此病永々令停止候、御互に申合候而家業に致出精相守行末致繁昌子孫永相保候得者、先祖之精靈令喜悦候、依而家道敎訓如件。

寶暦六年丙子二月十八日

釋宗旦
釋宗丹
傳筆人　本間四郎三郎
光丘華押

本間新四郎殿

光丘又乃父の遺意を承け、寶暦八年二月を以て五丁野廣野に面地百間四面の地を相し、新たに接待の寺を建立し行旅を宿泊休憩せしむるの便宜を與へ、漸次規模を擴張して經藏を設け儒佛の書籍を收容し、之に學田を附して篤學の輩をして就學せしめんことを請願せしも後議に附せられ、尋て幕府より新寺就立停止の發令となり事頗る至難に屬せり、然れとも常に遺訓を服膺し、安永元年八月二日之を請願し、此間十五年也苦心必成を期し、公私の用務繁劇なるにも拘らず、拮据計畫して更に鶴岡眞宗淨敎寺の廢寺に屬するものを種德寺乃父の院號也と改稱し酒田淨福寺に隷せしめ、院家格に陞して之を五丁野に再興し以て宿昔の志を達せんとし、寛政二年十一月三ひ之を請願せり、藩主其至誠と熱心とを感し百方斡旋し幕府の內庭及ひ要路に悃請し、力を極て成功を企圖せられしも國法の禁する所、復た如何ともする能はす、後本願寺大谷派亦爲に幕府に出願し、藩吏其間に奔走盡倅せしも遂に成らすして止む、當時光丘の資望太た隆く內外意を屬し、凡そ志す所達せさるなく、期する所成らさるものなかりしに、唯此一事のみ不幸にして能せさりしと雖も、其至孝熱誠にして如何に志操の進取堅忍なるかを證するに足れり。

光丘の家庭に於る愛敬竝ひ存して倫理の間洵とに圓滿なり、且町民に對するに篤實にして頗る慈善に盡せしを以て、壯年身を市井に伍せし時より夙に藩主の聞く所となり、町內の貧民を救恤し且能く家を齊るを以て家格を陞せられ、又賞詞を賜ふこと數次なり、而して光丘をして最も其自信力を養成して剛毅堅忍ならしめしものは、敦く神佛を信仰して持敬存誠の念に專一にして、且家を齊ひ世に處するに儒敎の精要を實踐せしに職由す、而して平素の行爲皆此根底より出さるはなし。明和七年六月六日藩主忠德公日光社勤番の際、人夫千人を献し郡奉行假役として扈從を命せらる、此時事態の頗る大にして且敬慎すへきを以て、三年の性命を犧牲にして十二事を以て佛陀に誓ひたりと云。

是の如き心靈の淵源より發現する事業は、自信力非常に鞏固にして且成功せさる者寡かりしなり、故に藩主の國務多端の中より神社佛閣の獨力經營の外、淨福寺本堂再建の用材及ひ藏經寛政年間を寄附し、海晏寺瑞泉庵の建立、蕨岡祠內に寶篋輪塔を建創し、伊勢大廟に常夜燈を献し、藩主の命に依り三州魂場野に藩主祖先の室塔を建て、靈牌を回向院の祠廟に附

し、追遠の儀を全ふせしか如き。且、當時領內の社寺領多くは賣買質入となり祠堂荒壞に委す、有司と共に之か救濟の方法を講し、多額の資金を調達して其復舊を實行せしか如き、皆其持敬の誠心より出たり、子孫今に至て此遺訓に根據し、德義の根抵を培養して以て修身齋家の要義を實踐し、且光丘の經營せし神社佛閣は率ね資を投して修繕し一朝災に罹れは衆を督して復舊せしむ、現に淨福寺及ひ日枝祠前の隨神門再建の如き、巨萬の資金を費して壯大の建築を企しもの是也。

光丘又慈善に厚く陰德を行ふを喜ふ、故に天變地妖に關する異常の賑恤に論勿く、平素貧民を救濟するの米錢等は枚擧に遑あらす、茲に其顯著なるもの二三を擧へし、寶暦十三年三十二歲酒田町の失火多くして而も消防の用具備らす、應急の設備頗る疎なるを憂ひ火防用金を組織し、安永七年四十七歲酒田町の享保以來火災連りに臻り、町民概ね疲蔽し町費の負擔に苦むを慨し、之か救濟の方法を計畫して自ら若干資を投して人民の負擔を輕減ならしむ、之を酒田町雜用引足本立錢と云（今に至て全町每年の費額三分の一約一万餘金を投するもの蓋し此に基據す）天明の凶歉は寶暦以後の慘事と稱せらる、此際有司と共に力を救恤に盡し封內の窮民をして飢餓を免れしむるは、一は貯蓄する所の籾米の豫備に頼ると、又酒田町に於ては有志者と相謀り、糴座を設け價を低くし米穀を浩賣するもの前後四千五百餘俵、之に頼て凍餒の苦を免るゝことを得たり。

寛政元年五十八歲始て冬貸助力錢を創む、是より前每年末及ひ非常の變災等あれは必す米錢を出し窮民を賑恤せられしが、當時天明凶荒の後を承け細民冬期の飯料に差閊へ爲に產業に從事し能はさるものあり、光丘深く之を憂ひ各町に飯料錢を貸附し各貸錢ト稱ス長期低利を以て返濟せしめ、之より生する利子は極て貧困なる者に助力として施與するの方法を案出し、之を各町世話方に諭示し其受拂を取扱はしむ、爾後家例となり今に至て遵行せられ細民永く其恩惠を被る。

光丘藩主の爲に身心を貢献して成功せしもの頗る多し、就中財政整理を以て最も其顯著なるものとす、寶暦十年二十九歲郡代並に與內方へ調達金三千百四十兩を献納せしより、次て明和四年三十六歲藩中財政整理を命せらる、當時諸士の生計率ね困難にして高利の金錢を借り、一時の急を凌き勤もすれば士の躰面を黷すもの往々之あり、藩主之か救濟の方法として光丘をして長期低利の金額を貸附せしむ、越て寛政五年三十七歲出府を命せられ、藩主の負債消却及ひ鶴岡酒田兩城修繕を命せらる、之を藩の財政整理及ひ土木事業に着手の嚆矢とす、

同年六月將軍家貢米場修繕總用掛を命せらる、蓋し貢米は幕府直領の租米を蓄積する處にして、寛文年中河村瑞賢の創始するものに係る、去歲最上川洪水の爲に崩壞し、漸次危殆に瀕し被害將に測られさらんとす、有司大に之を憂ひ修治の方法を講するも成算なし、乃ち光丘に諮詢し之を設計せしむ、拮据經營其方法を計畫し當路の參考に供へしが、終に幕府の採用する所となり隨て此命あり、同六年五月に至て完全なる成蹟を告たり、後寛政十一年更に命に依り防護工事を施し、十二年十一月地理と水勢とを相し、壕を埋め柵を移し水害を避るの設計を按出せられしが、會ま病に罹て卒去す、有司其

遺按に因て之を成せりと云。

明和七年幕府大目附をして封内を巡檢せしむ、此に由て前年より鶴岡酒田に其旅館を新築す、光丘藩主の命に依り工事を擔當す、（現今の邸宅は此時旅館に充るが爲に新築せし故跡なり）

安永四年四月四十四歳出府を命ぜられ、藩主の前に召され手書を以て財政用務を拜す、是冬に至て財政整理の方按成る之を御地盤組立と稱す、按ずるに此方法は高利の貸金を低利に借替る事、年賦返濟法の事買物を現金拂とする事、別途貯蓄をなさしむる事等の數件に在が如し、六年四十六歳四月八日に至り節儉力行の令を中外に發し地盤組立法を遵守せしむ、此時に方り累年疲蔽の餘を承け負債の督責需用の請求交も至り有司之が措置に苦む、光丘中田某と共に其衝に當り斡旋最も力む、又七月に至り内庭財政の整理按を立て其逼迫を支護す、此の如く心力を盡して從事せられしも、後漸く弛み既定外の支出年々增加し且秋收登らず、再び財政困難の故態に陷り郡代等責を引袖を運て命を待つ、光丘曾て辭任の志を懷き屢請願するも聽れず、是歳九月切に之を請ふ有志百方之を慰止するも堅く執て可かず、敢て其職を辭す、是に至て内外の財政非常の困難を極め復た如何ともする能はざるに至る、藩主痛く之を憂ひ天明元年より三年間を期し非常の節儉を實行す、有司其意を躰し大に冗員を陶汰し費用を削減し前代未聞の節儉を勵行せり、是に於て水野内藏助江戸家老を以て内旨を光丘に傳へ力めて再任を慫慂す、乃ち深く藩主の知遇と水野等の誠忠に感激し、胸襟を披き蓄志を述べ奮起して財政を整理し以て其恩遇に報ぜんとす、仍て二三財政整理を命ぜらる、水野内藏助深く信任して敢て掣肘せず、力めて其心を收攬し精勵之に當らしむ、此時に當り提封十四万石に係る財政の弛張は其方針に存し、任重く望隆く爲に計畫するもの頗る多し、而して民費增加は國本を衰耗するの基なるに、從來代官等の作事土工を巡檢するや送迎饗應の供給は悉く農民の負擔に屬し、之を鄉賄と稱す、漸次過大に流れ費用貲られず、藩主之を憂ひ藩老に命じ民費減少の方法を討究せしむ、乃ち水野の諮問に應して意見を陳す、其第一着には八組鄉賄を藩費支辨となし、毎年金百兩を獻して自ら賄料渡方を擔當し因て費用に制裁を加へ以て民力の一部を休養せしめんことを請ふ、將た藩主率先し非常の節儉を躬行するを以て自ら奉すること極て薄し、故に毎日饌羞の料として年々若干金を獻す、且其財政の整理するや毎に收支を計畫し入を量て出るを制し力めて削減を加へ、有司をして之に率由せしむ、蓋し光丘の此難局に當るや深く藩主の殊遇と水野の知遇に感激し、一身を以て邦家の安危に任し心力を盡して不急の費を省き、必須の途に充て拮据經營の結果需用の供給負債の消却等を整理し、後顧の憂なからしむるのみならず、未だ周年ならざるに豫備金として千九百餘兩を蓄積し、經費の剩餘千四百餘兩を府庫に收藏せしめ、一藩初て愁眉を開くに至る五十一歳

寛政五年藩主特に農民の疾苦を恤み藩老に命し課役を減少し民力休養の方法を具申せしむ、是に至り富國足民論を呈す蓋し農政を根抵より釐革し宿弊を滌濯して富國足民の方法を縷述せり、所謂鄉方御改革と稱するは之に基くものにして爾

後民力漸次恢復するに至れり、其文に曰く臣光丘拜手稽首而言、曩辱賜二富國足民論者一、謹拜而受レ之、熟讀數四、雖レ不レ得レ知二其撰者一、實是微言哉、今幸得下遭二明盛之世一、處中不諱之朝上、寛二其罪一、使レ得レ畢二其辭一、臣雖二不敏一、敢言二上三策一焉、夫天不下爲二人之惡一寒、而輟中其冬上、地不下爲二人之惡一險、而輟中其廣上、君子亦然、不下爲二小人之恂々一、而易中其行上、何則、天有二常度一、地有二常形一、君子有二常行一也、雖レ然、臣又聞レ之、天道虧レ盈而益レ謙、地道變レ盈而流レ謙、人道惡レ盈而好レ謙焉、今夫欲二富國足民一、則無レ如レ薄二稅歛一、且夫貸レ民賤レ利而命二庄長一安レ民敎以二謙約一、職二正百姓風儀一、時巡檢策勵農業一、勸懲定レ制、免二衆庄長之拜賀式禮一、河南河北各出二一人一、令二參勤一、則減二其費用一、薄二民軍役一矣、雖然、薄二租稅一有レ術、歛二貢米一、毎斛減二四外一、則十万斛、爲二何何斛一、積二之五年一、則爲二何何斛一、爾時無レ偏無レ儻、貧民之賑、則初可レ道二富國一也已矣、誠乎、民者爲二國家之基一、無レ農則王公何以食、無レ農則妃嬪何以儀、天下之衣食皆農是出、詩曰、嗟我農夫、我稼既同、上入二執宮功一、晝爾于茅、宵爾索レ綯、烝其乘レ屋、其始播二百穀一、猶レ是觀レ之、凡百皆從レ農出、而春鑿二永冲冲一、耕鋤是勤、夏不レ避二炎熱一、疲二耕耨一、夜苦入レ水、虻蚊噬レ膚、秋猿狩羆鹿食二田園一、畿息二防嚴一、至レ缺二租稅一、則父老妻子、不レ得レ文二歳月一、飲食男女、遊觀高會、人人實所レ欲、而農夫不レ能レ安二寢食一、偶不幸罹二災癘一、負債則水滴微、積積焉爲レ泗、卒至二于溺一而不レ可レ援、悲哉、愷悌君子、民之父母、雖レ道二君子有二常行一也、虧二此盈一而援二彼溺一、令二民得二其所一、則郡國之廣、生民之衆、庄長爲二之田畯一、時勸竭レ精全レ業、於二富國足民一、何難之有、光丘不敏、管窺蠡測、敢抒二万一一、誠惶誠惶、不レ勝二戰栗之至一、謹上言、」

寛政亥丑夏下浣　下臣　本間四郎三郎

之を要するに四民を敎て謙約を實行せしめ、百姓の風俗を醇正にし農事を奬勵して時に有司を巡檢せしめて、怠惰を懲誡し勤勉を行賞し里正村長等の虚禮を廢して冗員を省略し、毎年貢米の中より幾分の減額をなして蓄積し以て細民救恤の用途に備へしむるに在り、想ふに廢丘の施爲都て積極と消極とを竝行す、故に財政整理の任に當るや、常に半面は非常の節約を履行し、半面は幾分の貯蓄を實行せり、同家は如今專ら本農主義に基き、本間光美隱居シテ市隱ト號スし、三十年前より計畫履行せしもの瀕年に至り成蹟良好にして四民其慶に賴る、隣縣より人を派して模範とするもの多しと云。

（光丘の藩主の爲に獻金又は非常の國役ある毎に調達をなしたる事蹟は枚擧に遑あらず皆省略す）

光丘又公義に厚く社會に交るには專ら信義を重んず、故に他藩の爲に援助を與るの事蹟少からず、或は支藩酒井大學頭松嶽藩主の財政非常の困難を極め將に破綻せんとするに方て、乃て宗藩に請ひ特に光丘をして其財政を釐革せしむ、又同城樓炎上して工事を起す能はざりしに寛政四年六十一歳獨力にて之を建立せり、（如今茂跡ヶ學校に充て正心學校と稱す）其他新庄、本庄、龜田、矢島の諸藩の爲に盡されし事蹟は之を略す、中に就て最も趣味に富み且職司の好模範とすべきは米澤藩に於る事實なりとす、上杉鷹山公は德川治世中に於る一二の明主にして、其賢

太夫滝戸太華翁と水魚相親み、異体同心にて善良なる治蹟を擧られしは衆人の知る所なり、而して太華翁は光丘及び嗣子光武とは非常に交誼親密にして邦家改革の資力を保護せられしは一二にして盡さず、而して翁の高潔なる光丘の信義に富る左の一節を翫味せば蓋し思半に過ものあらん（滝戸太華翁と題する書中本間家の高義太華翁書東の下より抄錄す）

此一節は家國の爲に身を終る迄謹慎の深かりし事、窮苦の中にありと雖も淡泊を求る所なかりしこと、並に本間家か翁の爲に懇篤至らさる所なかりし事を露はしたる者なり、翁自ら言る如く如何にも暮し向は不經濟にして、就中嘗て天明三年の冬隠居したる後は徹骨の貧に苦みたり、（中略）其後中老を命せられ五百石を賜はりしも不相變不如意なりしを以て、其際治廣公に内證難渋の儀を以て特に百金を賜りしも翁は辭して受さりき、其次第は恩賜を辭すと雖して記逃せり、然るに今此手束に依は其後奉行職に進み、千石を賜りし之に男政以の家祿二百石を合するも相替らす立行難ありしものと見へたり、翁の如きは只國を憂るを知て其身の勞を厭はす、只民を富すを知て其家の貧を顧みさるものと云へき乎、去は本間家にては常に之を氣の毒に思ひ、何かなして翁の老先を樂ましめんものと種々工夫の末、遂に百金貯を仕組、翁の懸金は本間家に於て擔當せんと迄の厚意を申出吳られたるに、翁は深く其厚意を喜ふと雖も、かくては心に安んする能はさるを以て、君家の恩遇の隆渥なると家内の取扱の懇篤にして朝夕更に不自由の事なき趣を言顯はし、本間家の安心する樣に申譯且其厚意の謝して堅くいなみたるは翁の用意の周到なるを見るへし、然れとも本間家が斯迄の厚意は華覓其身を樂ましめんとの趣意なれは、翁は其厚意を空ふするに忍ひさるものと見へ、かれて其品を歓て聊か樂を鈌居たる毛邊紙を懇望に及ひたるなり、嗚呼天下廣しと雖も百金貯を固辭して毛邊一本を懇望せしは翁の外に其功を見さるものと云へく、又人の爲に百金貯の懸金を擔當するは本間家の外に其類あらさる特志と云へし、（中略）加之御添肴の思召あらは餘節の二十も三十も御添下され度旨書添たる如きは平生に於て其交の格別に親善なるに非るよりは言難所にして、此一事を以て見るも翁と本間家との間は如何に懇なりし乎を知るに足る、偖又余は特に此に一言して讀者の注意を呼んと欲するものなり、翁は家國民人の爲に病の身にあるを忘れて此手簡を認めたるも、米穀買上の爲に引換金依頼の箇條と本間家の厚意を謝するとの箇條とを書き終ると同時に、病衰の爲に最早運筆の叶ひ難く愚老か拙筆云云と云所より筆を男政以に渡して代書せしめたる如き其病衰の甚きを見るへきなり、嗚呼翁か是の如きの病衰なも願みすして此執筆に及ひたるは、當平古に稀なる忠節にあらすや、此編を讀む者何そ一掬の涙を灑かすして可ならんや、

嗚呼古人の忠誠眞率にして信義に懇切なる想像の外に出づと謂へし、上來招撫する所の事實は概略に過さす、抑も光丘の一生は創業守成とを兼全して邦家の困難を拯ひ、且百年の長計を子孫に遺せしもの、最も天縱の偉器に因ると雖も、亦藩主忠德公の賢明にして、人材を登庸し、文敎を興し、武道を振ひ、奢侈を誡め、謙約の風に導き、困窮を救ひ、士民を撫育せし偉德に倚らすんはあらす、我庄内の地古より謙抑の風を尙ひ、聲名の他に傳るを喜はす、故に世道人心に裨益するの事蹟も多くは湮沒して世に傳らす、惜むへきにあらすや。

學問は須らく活道理を看んとを要すべし死道理を守著せんとを要せず、枯草陳根、金石陶瓦の器、之を死物といふ、其一定して增減なきを以てなり、人は然らず進まざれば退く、退かざれば必ず進む、一息の停るなし、死物の著く然ると能はず、故に君子は過なきを貴ばずして、能く改むるを以て貴しとなす、

日曜講話

光に觸るゝ者は安慰を得べし

近角常觀述

本日この題を出しましたのは、近頃道を求める爲に苦悶をせらるゝ人々の訪問を受ける事が殊に多い。私は屢々話すのであるが、こういふ人々に對して話をすると共に私自身に於ても益經驗を深くさして貰うのを喜んで居る。そこで今日は私が近日來苦悶中の人に接して申しました事、且つ其人々の其後の經過を御話して重ねて私自身の信仰を表白して見ようと思つて此題を特に出して置きました。

全躰信仰といふ事は何ういふ事か私にも結局は解らぬのである。私の經驗については度々申しましたが初めて御聞き下さる人々の爲に一應申しましよう、私は今より八年以前に於て、凡そ半ヶ年の間殆ど寢食を忘れ晝夜を別たざるまでに大なる苦悶に陷りました。然し其結果は、初めには殆ど生理的にも變化をした樣に憂悶一轉廣廓なる天地に翺翔する如く感しました。私は此苦悶中に於て何うかして此人生上に確固たる希望を求め而して自分に對して滿身の同情を献けて吳れる友人を得んとしたのであるが、然し人間には遂に之を求むる事が出來なかつた。唯自分に對する滿身の同情者は佛陀であるといふ事を知つた。世に友人といふ者も多いが、先つ自己か其友人に對して滿身の同情を献ぐる事が出來ないと等しく、友人より滿身の同情を得んとするは出來ない。滿身の同情といふものは佛の慈悲より外にないのである。かく申せば私か一念頓悟した如く見えるかも知れないが、決してそうでない。八年以前の苦悶の時に頓悟したのではない。其後漸々進んで今日に至り、少しつゝ解らない事を解らして貰ひ、氣の附かなかつた事を氣を附けさして戴いたのである。偖輓近の求道者の二三の實例を申上よう。

先つ第一の例は先日私は加賀に參りました、其以前に嘗て私か著はしました「信仰の餘瀝」を其人に送りて置きました。其人は固より頗る堅い信仰家であるが、其夫人は其夫の信仰を了解する程にはなかつた。處が此度信仰の餘瀝を讀まれました爲に、初めて佛の慈悲の大なる事を感せられ、夫れか爲めに夫が多年の行爲は全く信仰の上よりせられしものであつたといふ事を了解せられ、深く佛陀の救濟を喜はるゝといふ事を加賀に參りて聞きて、是唯事ではないと感じました。第二には先年煩悶の極途に華嚴の瀧に身を投ぜし藤村操といふ人の友人て昨年同じく苦悶に陷りて度々求道學舍に來られた。然し昨年五月以後來られなくなつたから何うせられたかと思ふて居たが、今年二月の夜の談話會に出席せられた爲めに、篤と私の經驗を申して置きましたが、昨夜又來られました、處が此度は大に安慰を得られて、私の信仰の餘瀝の第一章の意味を充分に了解する事が出來たといつて居られました。私はか

ゝる人々に接する毎に非常に有難い。然し其人々か信仰の感想は何んなものかといふに、私も解らない。勿論私の書たもの、私の言た言葉が信仰を與へたのでも何でもない。唯其人々か佛の慈悲佛の力を感せらるゝのか、歴々見らるゝ樣である、これを不思議といへは不思議である、説明する事か出來ないのである。然し此間に大なる味があるのである。是等は信仰を得られた例であるが、何うしても信仰が得られぬといふ人の例もある。夫れは最早一年以上も苦悶をして居らるゝのであるが、尙以て光が感ぜられない。處が此人は實に眞面目なのである。其人の言はるゝには、かく煩悶に陷ると、學問にも更に意義がなくなる、意義なきものを何の爲にするかといへば親の心を安んずる爲にして居る、こういふ風になると人の同情を受くる事が苦しくなる、人生が厭になる、東京に居るにしても可成田舍の樣な處に住ね。何をしても面白くない爲に、心ならずも自然の景に對して暫く憂を散して居ります。かゝる狀態になるのは、自分か佛を見る事の薄き爲であると思へば思ふ程、愈解らなくなつて益々苦しみを深くすると申されました。が苦悶中にはかくあるが普通である。然し信仰は直接であつて決して人の言葉や、書物で得らるゝものでない。禪家では不立文字といふ事をいふが、中々味がある。言葉や書物は唯佛に接する緣たるに過きない。信仰の問題は唯直接に光に觸るゝといふのが最要義なのである。佛陀の光に接觸して佛の力か自分に加はりて初めて安慰を得るのである。佛の願に觸光柔輭の願といふのがある、衆生の類我が光明を蒙りて、其身に觸るゝ者は身心柔輭にして、人天に超過せん、若し爾らすんば正覺を取らじ、觸るゝと云ふ語が殊に有難い、これ全く直接である、言語、書籍、理屈、是等は皆間接である。信仰上何等の利益もないのである。全躰五官の感といふは直接のものである。私が今車の音を聞たとすれば、夫れか事實ならば假令他人が車の音がせぬとか何といはうが、更に其言を容るを許さない。見るといふのも同じである。茲に花ありと見た以上は、他人がそれは汝の目の病である、然らされば惡魔の所爲である、其處に花はないては無いか、と何といふても關する處ではない。見へたと云へば見へたのである。觸るゝといふのも五官の一である。冷暖自知、實に其通である。佛の慈悲、佛の力に直接に觸るゝといふ事が、もう宗敎の眞の要義である。こゝが實に有難い。然し茲に注意を要するのである、餘り言語を言ひ過ぎると誤りが生じて來る。

今日の題は都合上一昨日出したのであるが、昨日私が求道學舍で會た人の例は此話をするのに最も適切なる例である。此人は尋常中學に在りて殆んど狂氣の如く、常職を欠いて居た程であつたそうですが、其の人の話には、私は佛の存在に就ては毫も疑はず又佛は本体とか理性とかいふ如く冷なものとは決して思はないが、然し感謝とか歡喜とか有り難い心が起らぬが、これは誠に苦しい處であると言はれたに就て、私は上に述べた如く自身の經驗を述べて極力佛陀の慈悲の高大なる事を談り、實に有難いではないかといふ風に言た處が、其人は愈解らなかつた樣であつた。そこで私は其の人の解らなかつた事に氣がついて誠に慚愧に堪えなかつた、そは

自身に反省して考へたのである、一躰自分はあれ程有難そうに言つては居たが、常に夫程に感じて居るか何うか、と翻て己を顧みるに實に淺間敷い、自身は朝以來何うして居たか、飛び立つ程に喜んで居たか。中々そうでない。種々の考の爲に殆んと忙殺されて居たのである、有難といふのは實に折々暫時の事であつた、私は實に心よりも言葉か多かつた。彼の人の道を求むる切なる心は私か慈悲を說いたよりも一層眞面目であつた、私は一度安心を得て喜んた結果、御慈悲に馴れ易いのである、夫れ程に有難い思ひづめにして居るのではないのである。然しこれか爲に佛の救濟を疑ふ事は毫もない。嘆異鈔第九節に唯圓坊の問に對する親鸞聖人の答か出て居る、即唯圓坊の問は念佛申しゆへとも踊躍歡喜のこゝろをろそかに、さふろふこと、またいそき淨土へ參り度き心の候はぬはいかにとさふらふやらん、といふのてある。ろこで聖人の答か有難い。親鸞も此不審ありつるに唯圓坊同し心にてありけり。死後に於て理想的の淸淨の世界かある已上は一刻も早く飛んて行き度い筈てある、其次の言葉に、よく〳〵案じ見れば天におとり地にれとる程に喜ふべき事を喜はぬにて、いよ〳〵往生は一定と思ひ玉ふべきなり喜ふへき心ををさへて喜はせざるは煩惱の所爲なり、喜はれぬから佛陀の救濟かあるのである、喜はんとしても喜はれぬは即煩惱かあるからである。其次に然るに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれは、他力の悲願はかくの如きの我等か爲なりけりと知られて、いよ〳〵頼母敷覺ゆるなり……久遠劫より今迄流轉せる苦惱の舊里は捨て難く、未た生れざる安養の淨土は戀しからす候事、誠によくよく煩惱の興盛に候こそ名殘おしく思へとも娑婆の緣つきて、力なくして終る時にかの土へは參るべきなり。希望ある世界なれはとて、此世界の執着も中々に强いのてある。我々が現在此世に於ても長く他鄕に止まつて居て故鄕に歸る時ても何となく他鄕を去り難い樣なものてある、かくても力つきて命終る時淨土へ參るべきてある。若し我々に煩惱かなければ、直に眞如法性の佛を見らるへきてある。然らは佛陀の救濟を待つ必要はない。喜はれない、感せられないといふ事か即ち佛陀の救濟のある所以てある。是等の言葉を昨日も思ひ出したのてある。彼の人の喜ばれぬと言はれたのは事實てある、眞てある。喜れぬものを强て喜べと言つたとて强て喜はむと企てる程喜ばれぬのてある　煩惱の障ある爲に靈光の覆はるゝ事もある然し今聖人の語を聞て見れは、喜はれぬとて最早靈光の存在を疑ふ餘地はないてはないか、と私は言の多かりし事を懺悔しつゝ其人に話しました處が、其人は初めて感せられし如く却て大に喜ばれました。其人か眞に佛の慈悲を感せられてあるか、ないかといふ事は常によく解るが、此人は確かに靈光を信せられたものと思はるゝ。其次に私か感しましたのは、親鸞上人の悲願愚禿鸞愛欲の曠海に波沒し、名利の大山に迷惑し定聚の數に入る事を喜ばず、眞證の證に近つく事を樂まず、愧づへし、悲むべしといふのてある。前に述へた嘆異鈔の文と照し合して一層明了てある。定聚の數に入ることを喜はずといふは所謂踊躍歡喜の心疎かなることてある。眞證の證に近くことを樂まずとは、いそぎ淨土に參りたき心の起らぬことて

ある。實に聖人の仰の如く、天に踴り地に躍りて喜ふべき筈である。然るに夫れ程に喜ぶことが出來ぬのである。喜べぬは此の如き肉の身体や、煩惱の心があるからである。夫かため喜ばれぬからとて攝取の光はたしかである、攝取の光と云へばとて肉眼で光明を見たり、生理的に神秘なことを感するのではない。未燈鈔に「往生の信心に疑なくなり候へば攝取せられまいらせたる故とみへて候」とある、心にたしかに感ぜらるゝが攝取不捨の味であるとの事である。此たしかに感受する信心だけは疑はむと欲して疑ふべからざるものである。喜ばれぬからとて此確かなる點には毫も增減はない、喜ばれぬを喜ばれぬと露骨に言ひ放つ飾のなき聖人の心が慕はしい。して喜ばれぬが喜ばれぬにて、いよ〳〵救は確であると喜んで居らるゝのである、是實に信仰の精髓である。

たゝけば開かる、とは仰て進まぬ人に言ふべきである、然し最早進むべき餘地なき迄に切りつめて居る人には、首を廻らせといふべきである、首を廻らしさへすれば、已に光の後ろには來れる事を認めらるゝのである。我等は心の淸らかなるを待て而して佛光を仰ぐに非す、光は常に我等の周圍にある。然らは見えぬ〳〵と徒らに進むよりも、顧みて直ちに佛の慈悲に歸するか宜い。內側へ開くべき戸は唯押したとて外側へは開けないのである。それもこちらから力むのではない、向ふの方から開いて下さるのである。佛は信ぜんと欲して信するに非して、佛の光が心に屆きて、實に信せざるを得さるか故に信ずるのである。觀經に說いてある如く、韋提希夫人か世尊に對して、願くば我か爲に憂惱なき處を說き給へといふに對して世尊か夫人に告け給ふに、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る事遠からすと、我等は只首を廻らして直接に光に接觸するのである、全躰信仰を起すといふのも光に觸るゝといふのも、六ヶ敷事ではない。佛の力の偉大なる爲に、こちらの方で彼是と取り計らふには及はぬ、穢れたるこの心ではあるけれども、唯仰ひで佛陀の境界の淸淨なる事を觀じて進むで行くのである。又己の冷なるを見ては佛陀の慈愛を感ずるのである。我等は此肉の躰を捨てゝ眞實の涅槃の境に入りてこそ、佛ともいふべく、淸淨なりともいふべきである。人を救濟する抔といふ事も此境に入りてこそいふへきである。ここまで進むと吾人は死後の佛の境を觀する事が一層有難さを增すのである。常に佛に接しようとして御出なさる御方は此邊を能く味うて貰ひ度い。我々か平生やつて居る事其事か、たとひ苦しむて居ても其事か皆佛陀の指導であるといふ事を感するのである。昨廿日は隨分悲慘なる號外か出ました(吉野初瀨沈沒)此事とてもそうである、軍艦が沈沒し且つ多くの生命を失ふたといふ事は實に悲慘であるに相違ない然し國民がこの爲に悄沈したならば、駄目である。此悲慘は即他日平和の階梯である事を信じて進まぬば戰爭は最早出來ないのである。

曩日軍艦日進に乘組て居る某海軍々人が、「信仰問題」を送りて呉れといつて來たから、送つたといふ事を私の友人から聞きました。夫れをきゝましたから信仰の餘瀝六十部を荷造りして、かういふ意味の書面をも添えて出しました。假令世間の事は間違ふ事があつても佛陀の無碍の一道は眞實にして、

間違ふ事はないといふのであります。軍艦は碎くるも生命を失ふも佛陀ばかりは少しも碍へられぬ、今や生死の巖頭に立て居なさる軍人諸君が、私の著書を讀むで下さるかと思ふと私は非常に嬉しく感じます。人生は常に慘怛たる光景に滿たされて居る。戰爭も起れば軍艦も破れる。然し乍ら何うしても破れさるものは、佛陀の大盤石の上にうち立てたる信仰である、人生若し絕對に暗黑ならば如何にして暗黑なるを知るべきや、暗夜に暗夜を知る事は出來ない。人生の暗黑たり慘怛たるを知らるゝ所以のものは暗黑慘怛の後より、偉大なる佛陀の光かあるからである。夫故に我等は唯信仰の一燈を點ずれば、此暗憺たる人生其儘か大なる意義を生ずるのである。彼のトルストイ伯の譬へか面白い。信仰の人は恰も是迄東に向へりし者が一轉して西に向ひしが如く、其人は假令以前と同一の景色を見るも、其狀態は全く變して居る、右は左となり、後は前となつて居る、從來は意義ありとなせしもの今は瓦礫と變じ、意義なしとなせしもの今は金玉と化して居る、親兄弟國家皆悉く確然たる意義を有するものとなる、人生にして若し信仰がなかつたならば總て皆虛僞であるといふて居る。涅槃經に「一切の衆生は皆是れ如來の子也、世尊大慈悲衆の爲めに苦行を修し玉ふこと人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如し」とある實に親か子の爲に盡さるゝ愛情は、善を賞すると共に惡をも咎めず、全く善惡を超越して居る。此切なる愛情は、眞に佛陀の慈悲の顯現である。歎異鈔に、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は萬の事みなもて、そら事、たは事、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ末通りたるまことなり、とは實に言ひ切た言葉である。諸君若し佛陀の指導に從ひて、同一光明の中に安住せられたならば、最早眞躰同心である、一方にて呼べば他方にて答へる、一人が感ずる事は、皆等しく感ずるのである。同胞一躰の極致は全く茲である。一度佛陀の慈悲に接觸して安心さして貰へば、三苦消滅心意柔輭、自ら感謝の涙に咽ぶのである、こうなると自ら有難といひ度くなる。然し煩惱の盡きる筈はないからして、風雲常ならざるは云ふ迄もない事である。唯風雲の爲に、皎月のあるを忘れてはならぬのである。近頃は殊に道を求むる爲に煩悶せらるゝ人々の多きが爲に特に此題を選んで御話したのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

佛教の戰爭觀

上杉　文秀

戰爭といへば直ぐに殺人を聯想する、殺人を思へば最早自己の生死問題に入る。是實に古來紛亂の世にありて宗敎弘通の勃興を見る所以であらう。近く我邦の歷史上、源平十三年の戰に淨土敎を初め禪宗や日蓮の引續きて起り、應仁文明の戰亂に淨土眞宗の再興を見たも其一例である。今や日淸戰役には餘りに眞面目ならざりし國民も、日露戰爭に際しては幾分か眞面目らしくなりてあるは、是我國民の一進步といふてよかろう。そして其眞面目なることに於て、自己の生死問題ほど眞面目なるものはない、されは宗敎心の勃興も自然其脉

絡を見出すに難からぬことゝ思ふ。此時戰爭—殺人—生死—不安—求道—佛敎…安慰といふ、約り修養を爲すへく餘儀なくされたのは、洵に吾人の幸福ではなからうか。今は殺人と佛敎の關係を考へて見やう。先つ廣く經論に散見するものを總合すれは、

一、殺生は罪惡なり作すへからす

此は說明までもない、普通佛敎の誡門自利の敎義で、五戒八戒、十善戒、二百五十戒にも十重禁戒にも、大小乘總てに通する禁制である、唯小乘は自己修道を本とするから、婬戒を第一に置けとも、大乘は利他主義であるから、殺生戒は第一位にある、何れにしても殺生の罪惡なることは、諸業の中の主要なるものである。次は

二、殺生を行して佛道に入る

此は前とは殆ど異例でありて、彼の央掘摩羅が千人切を行ふて、九百九十九人を殺し、今一人を殺さは生々世々婆羅門の家に生るゝといふ迷信により、會て母の來れるを見て、劒を揮ふて母を殺さんとし、忽ち釋尊に遇ふて釋尊を殺さむとし、未た果さすして遂に佛道に入りたりといふもの即ち是れである。之を天台大師は摩訶止觀に引きて、彌々殺にして彌々慈なりといひ、吾人は罪惡を觀して罪惡の眞相に達せねばならぬといふてある。此にも事理二門の解釋がありて、自ら殺生の罪惡を犯して、それが導きとなりて佛道に入るといふは事的解釋である、若し電光影裏に春風を斬るといふやうに斬らるゝものも平氣で、斬るものも罪惡を認めぬ、即空無生の觀慧に達したるを理門の解釋といふ。彼の龍樹の高弟提婆菩薩が外道の爲に殺されたときに弟子を誡めたのも此の道理てある。快川禪師が心頭を滅却すれば火も亦凉しいといふたのも此れてあらう。但し此一項は餘程困難てありて、事門解釋の方ても、吾人が入道を豫期して殺人をするといふ理屈には行かぬ。又理門解釋の方は殺さるゝといふことが已に大根や人參を切るやうに思ふからは切るものも其精神てなければならぬ、吾人の如き一寸口先で罵嘲されても腹か立ち、蚤蚊にさゝれても寢られぬといふやうなものては到底實行はならぬのてある。

三、自ら殺生を行して他をして佛道に入らしむ

此は純然たる利他主義で、法華經には提婆達多は釋迦の善知識なりといひ、『入大乘論』には提婆は是れ大頻迦維菩薩なり衆生を救はむか爲に敢て逆罪を作るとある。此は提婆がありた故に釋尊の敎義は彌高く顯はれ、守屋か妨を爲せしゆゑ聖德皇の佛敎は彌榮へに榮へ、此によりて後世幾萬の生靈が佛陀の恩光に浴したか、彼れは逆罪を作りたれとも、此はそれによりて佛道に入りたりといふことになる。或は亦提婆其人は逆罪によりて地獄へ墮ちたけれども之を觀たものは其罪惡を知りて自己を誡めて善道に遷りたならば、彼れ提婆は亦大悲菩薩行を爲せりといふことになる。此には最も深き注意を要する、其は天台の荆溪尊者が已に深く警めてある—斯例に從はんと欲すれば善く自ら斟量せよ、若し貪心に順はゞ終に持相にあらざるなり。—菩薩行だから虐殺もやれ、利他行だから人道もあるものか、大悲行だから人の物は我物だといふやうに、貪狠飽くことなきものは、決して此一項には相應せぬのてある。されば此一項は大乘至極の純利他主義を指示されたものて、正宗の名劒は滅多に小兒には渡されぬのてある。

四、慈悲の殺生は福ありて罪なし

此は『大薩遮尼乾子經』王論品の意で、經文は左の如し

若し逆賊の王あり、兵を備へ來りて相侵奪せば、大王は先つ三種の思惟を起して陣に入り鬪戰すへし、何等か三種なる。一には思惟す、此逆王は慈悲心なくして自ら衆生を殺し、餘人の殺をは遮せず。我は今かくの如く相殺せしめじと。二には思惟す、當に方便を以て逆王を降伏すへくむば、士馬兵衆をして興に鬪戰せしめじと、三には思惟す、當に方便を以て活きなから繫き縛り取るへくむば、殺害を作さじと。此三種の慈悲心を生して、然る後に鬪戰すへし……大王當に知るへし、若し國を護り人民を養活せむか爲に兵を興し鬪戰する時は、上の如き三種の慈悲心を發して、主將に勅令して一に王の敎に依らしむへし、かくの如くして鬪ふ者は福ありて罪なし。

大乘敎義の戰爭を觀ることは、同し殺人といへとも正義公道の爲めに殉すると云ふ大慈悲の手より出つるものは、決して罪惡にあらすといふのてある。

五、淨土敎純他力の敎義より見れば

最も崇重なる敎訓が得られるのてある、其は諸君が已に掌中のに珍として常に拜讀せられつゝある『歎異鈔』の第十三章である。祖師親鸞聖人、一日弟子唯圓房に向ひ、汝は予の言ふことを信するかと。唯圓曰く然りと、聖人曰く若し然らば予のいふことは違背すまじきかと。唯圓曰く領狀すと。而して聖人曰く汝は今より千人を殺すへし、然らは極樂の往生は一定すへしと。唯圓驚きて曰く此身の器量にては一人をも殺し得へしとは覺えす、まして千人をやと。聖人あやしみて曰く、親鸞がいふこと違ふまじと今いひしは如何にぞや。此にて知らるへし、何等も意に任せ得らるゝものならは、往生の爲に千人殺すへしといはゞ殺されべきに、殺せといへと殺されぬは、全く殺すへきの業緣なきによるなり。是自己の善なるによりて殺されさるにはあらす。亦殺さじと思ふとも殺すへきの業緣あらは百人をも千人をも殺すべし」と。……噫予輩は此の敎訓を如何で仰かざるへきや。吾人の作業を見れば、實に善ならむと欲するも亦得へからす、惡ならむと欲するも亦得へからす、善も自然なり、惡も自然なり、『瑜伽論』に決定業に異熟決定と作業決定とを論してある。今日現在の善惡は宿因の催す所でありて見れば、戰鬪員を志願しながら之を許されさるものと、又家には飢に泣く妻子ありなから戰地に勇むものあると。是れ吾人の意のまゝならぬのが眞理である。されは戰爭の是非は理論上の分別である、殺生の罪惡と否とは修養の圈內に入るへきてない。吾人は生死の問題を大慈悲大願王の彌陀尊によりて解決して見れは。佛陀慈光の下には罪惡も迷闇にあらされば功德も依賴すへからす。此に至りて殺生も戰爭も無碍の一道たる絕大の信仰に對して何等の障碍もない。

* * * * * * *

信仰問題

苦悶の人に與ふる書

拜啓仕候。御友達より承り候へば、御許樣は非常の罪惡の觀念に打たれ玉ひて大に苦み候由にて、御友達より直接に御佛の御慈悲を說き申上よとの御賴みに付一言申上候。

御許樣は非常に自分の惡しきことを御感じなされ、日に夜に苦しみ玉ふよし、定めて嘗へがたなき御悶へと御同情申上候。私も一度御同樣の苦に陷り候爲よく了解仕候。私も世界中にたよるべき友達もなく、親子兄弟の間と雖心を解く由なかりしか、半年以上も苦しみ候後御佛こそ私の惡しき心をよく御知り遊ばして、かく悶え苦しむを憐み玉ふ御慈悲の塊にてましますと云ふ事に氣が附き候處、恰も佛樣こそ眞實の友達にてましますと云ふ事に相成、世界は眞暗に相成候とも此一人の打明けて任せ奉る心よりの友達だにあらば安心と云ふ次第に相成申候。コハ別冊拙著信仰の餘瀝第一章宗敎的同朋と云へる中に明らかに記し置候間、此處にて直ちに其一章丈御讀み被下度候。

此書物に記し置候通り御身の如く人を相手にして如何に心配なさるも何の益もなかるべく候。私も佛の御慈悲が胸にとどきてより後顧みたる處長々の間人を疑ひ、心を安んぜざりしは全く自分の心より作り出せし妄想にて實際は周圍の人は心一杯親切を以て慰めて呉れた事は相分り申候。サレド疑の中にあるときは如何程人が左樣言ふて呉れても、明るき光をみぬ中は自分の闇に氣が附き不申候。然るに佛樣は人間のやうに此方から疑へばとて心を隔てたり、此方から惡しく思ふたからとて見離し玉ふやうな薄情な方にあらず。此方が疑へば却て之をいぢらしく思召し、此方が惡しければます〳〵不愍と思召す御方故、先つ第一に此御友達に御任せ申して心を安んじ玉ふべし。かく佛の御光に接し奉りて四方を見回はし玉ふべし。他人は決して御身を惡しく思ひ、疑ひつゝあるものは一人もなきなり。見玉へ、今迄考へ玉ひしことは皆御心より作り出せし疑の陰法師たることを。

此御佛の深き御慈悲をよく示し玉ひしは、親鸞聖人の御言葉を書したる嘆異鈔と云へる御聖敎に候。恰も御心に適したる所に朱を施して差上申候間、其處をよく〳〵御味ひ候べし。要するに煩惱あればこそ助けむとの御思召なり、惡しきものなればこそ御佛の善き御心にて救ひ玉ふなり。もと〳〵佛は人を助けむとて佛となり玉へるなり。然れば惡人こそ佛の正客也。御上に年貢を納める時こそ金持は上にして、貧乏人は下なり。サレド飢饉の時御上より施米を賜はる時は、貧乏人は正客にして金持は御招伴也。此苦しめる衆生を助け玉ふ佛は惡人を正客とし玉ふ、饑饉の施米の時は「アノ樣なる金持ですら、施米を受け玉ふ、我等貧乏人は何の遠慮あるべき」と云ふならむ。如來の御慈悲は善人ですら救ひ玉ふもの我等惡人を助け玉ふは勿論の事也。嘆異鈔の善人猶以て往生を遂く、況や惡人おやと宣へる御心、實に〳〵身に泌みてうれしく候はずや。

最後に一つ古の人の固き信仰を得玉へる話をして筆を止め申すべし。香樹院師とて德高く信心深き知識ありけり。尾州とかの人にて常に其御僧に給仕せし老女ありしが、平生御敎化を蒙りてよく喜ばれしに、年老て御暇乞して國に歸りて法を喜ばれしが、重き病にかゝりてイヨ〳〵死に臨みしに、かく平常法を喜ばれしにも拘らず、イヨ〳〵となるとイカニも自分の罪の深き事を心配せられ病中大に苦まれ「今地獄に落つべし、鬼が迎ひに來れるが目に見える」とて床の中にて痛く惱み玉ひけり。其老女に一人の娘ありしが、平素母の敎によりて同じく法を喜ばれしかば、母の最後の樣子をながめて、イカニモ我身ながら地獄に落つる心地して母と共に苦しみを同じくして涙の絕ゆる隙はなかりけり。色々と母を慰むれど母の心に落入らねば長々の間給仕し玉ひし香樹院師に遇ひ奉りて直々の御說法を承り傳へばやと孝心なる娘は危篤なる母を殘し、心配ながらに晝夜兼行して京都に參り、香樹院師の寮を叩きて涙乍らに此由を申すに師は頗る不興の体にて「左程に自分勝手に地獄に落つるものは致方なし、殘念ながら落ちてしまへ」とありければ、之をきゝた娘は其言の下に自分が地獄に墜ちし心地して胸つぶれ其儘泣き伏し玉ひけり。さてしもあるべきにあらねど泣く〳〵寮を辭し去りしに、香樹院師の侍者之を見て憐の心に堪えず、師に向ひ「イカニモ嚴じき御敎なり、猶一度諭して賜へ」とありければサラバ呼び返すべしとの御返事なり。侍者飛立ちて娘を呼び歸りしが、娘は絕望の餘、頭上がらず。講師の云ふ樣「我々の地獄に落つる事は今更の事にあらず、當り前の事也。其落つるものを助け玉ふ御慈悲なればこそ身に泌みて嬉しからずや」と、一言きゝて娘躍り上りて喜び泣き玉へけり。其儘寮を辭して飛ぶが如く晝夜兼行して母の命あらむことを祈りつゝ、尾張に歸り玉ひしに母は猶病床にありて「今落つる、鬼が見へる」と悶へ玉ひけり。私は此事を思へば自分が前年苦しみしことを思ひ出して人の事とは思へず、定めて御許樣の長々の間苦しみ玉ひし御心にも同樣なるへし。カクアルトコロへ娘鞋のまゝにて驅け込み「今落つる」と叫ぶ母の聲に應じて香樹院師はの玉ひけり「其落つるものを助け玉ふが御佛の御慈悲也」と母一言きゝて飛び上りて歡喜の涙に暮れにけり。嗚呼今コソは初めて御佛の御慈悲身にしみて受けられたりと母子涙乍らに手をとりて大悲の救ひを感謝し奉りけりとなん。ナントうるはしき生ける御話に候はずや。聞けば御許樣の御娘子樣は御許樣の苦しみ玉ひつるを如何にしても解き奉らむとて心を碎き玉ふ御孝心にて在すとかや。されどいかにいとをしと思ふとも唯人間の力にては親子の間と雖、憂を解くことは能はざるべし。彼の尾州の人も娘が自分にて慰めたる時は何の功もなかりしにて知り玉ふべし。香樹院師若し初めに娘の願を容れて直に傳へ玉ひしなば、娘は其言のみを傳へ生ける佛の御心を傳へざりしならむ。サレド一旦「勝手に落ちよ」と叱り玉ひしかば娘も同じく苦悶に落ちし故、之に生ける佛の御慈悲を頂き玉ひけり、其生ける心を又直に母に傳へしめ玉へる也。我は斷言す。我此書を認むるとき佛の御心を直ちに傳へ奉る。之を讀み玉ふた御娘樣も聽き玉ふ御許樣も此生ける御慈

悲を受け玉はるべし穴賢々々御尋あらば幾度なりとも可申上候。かしこ。

明治三十七年六月二日夜燈下

茉の苦悶し玉へる方御許に

近角常觀

同一鹹味

無題錄

鈴木卓苗

◎

「宗教的」といふことばの用ゐらるゝこと今の如く多きはなからむ、その用ゆる人々により、それ〳〵意義を異にすべきが、わが好みて用ゆるは信仰的といふに近き意なり、信仰といふも、或人は幽玄の道理を丸吞みにすることなりと言ひ、又ある人は無限絶對と個人意志との融合することなりと言ふ、そのいづれかよく本來の意義なるやを知らされど、之を文字通りに考ふれば、あるよき人を信ずるの餘り、之を仰ぎ見るの意なるべきか、しかれば吾等なほ郷校にありけるとき、先生を以て最も賢明なるものと信じ、仰き見ては只管先生の如からむことを念としたりき、そのあどけなき少年のこゝろぞ、われ等が宗教の信仰なる、唯その信仰の動機とも言ふべき、内心の要求は、人生問題に根底を有するに於て、前者と異るのみ、只この相異の爲めに、前者を卑しとし、後者を尊しとするはあやまりなるべし、同じ泉の源ながら、かれは小川と流れこれは江海とたゝふるのみ、エマーソンは最もよく宗教を信じ、且つ之を識りたるの人なるが、その言ふ所に

德とは個人的意志が宇宙的心意の規定に服從するに外ならず、服從の習慣は即ち品性なり、

宗教は之に付隨して發する所の情緒を謂へるものにして、換言すれば個人的意志が宇宙的心意に對して起せる尊敬の念是なり。

と、言へるは、甚だ明晰なる説明なりとす、

されば、その著述の所々にあらはれたるものを見るも、宗教的要求を以て人生一切の要求の源泉的なるものとし、人生この要求ありて、始めて美も善もその價値と力とをあらはし、そは唯哲學者の用ゆる名辭に終らざるなりとせり、愛も宗教的に動く時初めてその神聖の意義を保ち、友誼もこの宗教的感情に基きて以て不滅のものたるを得べしとなせり、

求眞求道のこゝろありて、われ等信仰の門を入るべし、門を入れるものは已に門外の人たらず、こゝに「よき人」の風姿を學び、その言行を摸せんとす、こゝに始めて宗教起る、宗教的生活とは、その「よき人」と起居を共にするの生活なり、仰いて天空の莊大を觀るに、日月晝夜に並び、星辰列を正して之に從ふ、その間整然として序を亂さず、天の大をなす所以を見る、宗教的生活はかくの如きのみ、萬象悉くその所を得て、一糸亂れず、その利運を等うするに於て、宗教の使命こゝに全きを得む、聞くならく、露國の寒村ヤスナヤポリアナある、トルストイ翁は、極東の戰雲を觀望して、唯この大戰爭が「人類の自覺」に資する所幾何なるべきやを想へりと、宗教によりて進む人よ、之をきいて果して如何の感かある。

◎

「孟母三遷の訓」と言へば、八歳の童女よく之を知るべし、われ頃日、あることによりてこの訓の中に未だ嘗て示されざる教訓を會得したり、われ等郷校の師父に之をきく、人の幼弱なる時は、性質恰も白紙の如く、黑白未だ染まざるが故にその居る所によりて性質を變ずること、水の方圓の器に從ふが如きなり、孟子の母は賢なるが故に、よくその境を撰びて其子を居らしむ孟子の亞聖たる所以なりと、われ等之を以て、しかりとなし、今日なほ首肯す、しかるになほ一事の重大なることのふくまるゝあり、そは孟母の教育の全然信仰的―宗教的なりしことなり、

何をか信仰的なりといふ、

吾等罪をつくりたらむ時、刑罰を以て酬ゆるものは法律なり、しかるに宗教は、罪あるものは罪のまゝ、惡業に浸れるものは身の濡れたるまゝ之を救濟す、即ち法律は已になされたる罪過に向つて更に懲罰の痛苦を負はしむるに宗教はその已に過去に屬せる惡業罪過を顧みずして只管遷善改惡の一道を示すに止る、こゝに救濟の慈悲存す、孟母の教育は實にその後者にあらずや。

人こゝに過つことあるとき、彼の麁忽なるを咎め、人の子となりて不用意かくの如くなるべからざるを諭すは、吾等の常狀なり、之を諭すや可なり、更に遷善の道を示すことなくして止むは甚だ疎ならずや、

之を孟子の母に見よ、

子を處々に、或は商賈の隣に、或は墓地に於てせしが、兒のその馴れ易きにつきて、數々之を摸せんとするや、母は一言のその不心得に及ぶことなきは勿論、更に爲めに一の努力を以て矯正的用意をなすことなく易々として新しきよき道を求めて遷り去れるなり、人の子を教ゆると稱するもの、日々の用意こゝに至らば、唯彼等の天眞を損はざるのみならず、以て大人賢者を得べきか、孟子の母や賢なりといふべし、

◎

人々の特質とも言ふべき傾向を重んぜざる教育は咒はれたるかな、それに求むるに眞人を以てするはなほ水中に火を求むるに似たらむ、

今日何人も、よく時代思潮云々或は時世人を造る云々など賢しらだちて言ひのゝしれど、果して如何なるものを指せるやをば、言ふ人きく人共に知らじ、

之を今日の教育に見よ、同じやうなる努力を以てあらゆる課業の上に當らしむるは、なほ可なり、試驗を以て背水の陣地をしつらふるや、進んで均等なる努力を以て克つものはよし、退いて自ら好む所につかんとすれば水に沒してまた浮ぶべからず、これはこれ、教育者の爲す所なり、しかるに家に於ける所の父兄姉妹の、彼に對するや如何と見るに、又々斯の如し、況んや一般の社會をや、しかれば、學校に於て咒はれ、家庭に於てせめられ、社會に於て嘲けらるゝ世の少年少女の果して彼等の天眞の傾向につき得ざるや何をか珍とせ

む、こゝに於て我國に大賢跡を斷ち偉人の面影また瞻るべからず、如何となれば、その偶々出るものは、その出づるの日に出づるにあらずして、實に一人の天才を育するが爲めに幾百の劫數を閲みし幾万の精氣をあつめなしたるや知るべからざればなり、しかるをその天眞の傾向を蹂躙せば、何によつてか天才を育すべき、眞に嘆くべし、

○

「人の身は恰も美色と妙音とを以て築ける宮殿の如きなり、彼その感覺の中に朝暮の景と、無邊の星光とを有し、其頭腦の中に神府の莊嚴を測るの幾何學を有し、其心情の中に愛の亭樹と正邪の版圖とを有す、一個人間なるものをして其實を結ばしめんとせば、彼に先てる惣ての時代を盡して之を培養せざるべかちず。……」

○

母上問ふて曰く、「日々わが讀む所の新聞紙は月にして優に一冊子をなすべしその年にして實に書架に滿つべし、われ日として之を讀まざることなきに、爲めに得る所の智識一もあるなきが如し、爾が學校に於て讀む所の書、果して幾何ぞや、しかるに爲めに智を增すこと日時の如し、讀むこと同じくして得る所甚だ差違あり、何の爲めぞや」とわれ自ら知らず、敢て之を人に問ふ、

○

エマーソンの書に曰く

太陽は沒したり、されど彼に對するの希望は彼と共に沒せざるなり、星は出てたり、されど彼に對するの信仰は彼よりもさきに出てたり、渺茫たる天漢の中に坐して其眼深く且つ奮るし、其崇高なる辛苦は實に時の沈默に匹敵す、彼語ることあれば、其語雨よりも柔かに、能く黄金の時代を此世に出すべし、彼働くことあれば其技極めて靈妙に能く一切の藝能をして顏色なからしむ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

報謝の一念

百目木劍虹

一たび宗教の門に入りて所謂宗教的生活を送る人は、如何なる經驗を持ち來すものであらふ。心の春は永久光り輝やき、いつも春風習々として面を打ち拂ふのどけき樂園に逍遙し得るであらふか。考ふるまでもない、靜に歩みを後園に轉じ、身輕く心凉しくして、鳥の謳ふ、水の流るゝ何れか微妙の音樂ならざる筈はないが。さて實際に於て宗教的經驗は常に如斯樂境に接することはかたいのである。茲に人ありて宗教的一路を辿り幽遠のあなたに引き寄せらるゝとも、胸中の小天地は折に觸れ時に應じ黑雲を捲き起して、風叫び、雨狂ひ、落花狼籍の痴態を現ずることは殆と免るべからざる事實である。或は難ずるものはあらむ。これ信仰を得ざる人にありては幾分か怨すべしとするも、信仰の地盤に立てる人にして尙かゝる狀態ありとせば大に耻づべきことであると。此の言尤もである。併しながら限りある此の生を以て天地の悠久に向て、全く悟了し去ることは到底望むべからざる事である。大

悟十八小悟其幾回なるを知らずとは禪家の示す所、大悟徹底、こは望み得らるゝものではない。君子は容貌愚なるか如しと云ふ。悟り顏するものこそ眞の達人ではない。表に賢善精進の姿を裝ふもの、寧ろ內心に虛假不實のバチルスを包藏することを自白するやうなものである。無明の霧深うして煩惱の暗去りがたきは人生のありがちである。腹の立つは當然にして若し立たざるならば却て不思議のやうである。怒り狂ふは本來の性にして寧ろ怒らざるは不思議とせざるを得ぬ。人生はげに闇なり、迷なり、迷なるゆゑそこに悟あり、闇なるゆゑそこに光あるにあらずや。吾等は迷ひつゝ悟るなり、悟りつゝ苦むのである。宗教的經驗を經たるものこそ、最も涙多き人也。悲み深き人也。辛き人生の行路を味ひたるものと云ふべきである。

むかし支那の薛文淸公は二十年來怒を治むることに身心を勞したけれども、到底怒に打ち克つことは出來なかつたといふ事である。凡人にありては猶更の事で一生涯工夫沈思を凝すとも至難といはねばならぬ。身は佛の照護に包まれつゝ尙煩惱のやみ消えさらずして、時として怒氣汎濫し來りて法材を洗ひ去る淺ましき吾等である。喜ぶべきことを抑へて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり、とは吾々の眞面目を露はした、如何にも手强き敎訓である。怒の發するも煩惱の所爲也。腹立つのも煩惱の所爲也。人を罵るも亦煩惱也。人を責むるも亦煩惱也。慾心の起るもこれ亦煩惱の所爲である。古の語に世の中に何が恐しいとて人慾の險より恐しいものがないとして深く戒めてある。これ即ち三毒の中の貪慾である。むらゝと慾心の火が燃え來れば理性も分別も悉く敗北し、向ふ處何等の敵もない。親子の不和もこれより起る。朋友の信義もこれより破る。國家の平和もこれより紊るのである。噫これ貪慾の結果である。煩惱の所爲である。

猶稱して宗教的の人と云ふを得べきか、更に信仰の士と名くるを得べきか、曰く、稱して宗教的と云ふ、何等の妨ぐる所はない、更に信仰的と呼ぶ、何の不可かあらむ。宗教的の人もとより凡夫也。信仰的の人もとより罪の子也、然り罪の子也。凡夫也。腹の立つ當然の事也。人を呪ふ寧ろ其所である。凡夫なればこそ大悲の誓願に托するのである。願力無窮にましませば罪業深重もおもからず、障りあらば障りのまゝ、罪あらば罪のまゝいさゝかの計ひもなく、信の一念に於て常住の國、永遠の樂土に遊ぶことが出來るのである。

肉あればこそ、慾も起り、戀も動き、愚痴も生ずるのである。されば慾をされよ、戀を離れよ、愚痴を除けよと云はゞ取りも直さず、肉をすてよ、生を失へとの命令と異る所はない、肉をすて、身をすて、生をすてよ、何處にか人生の意義を持ち來すべきや。人身受け難し、佛法聞き難し、すでに受けがたき生をば此の世に受く、無上の幸福と云はねばならぬ。咲くにも時あり、散るにも時あり。吾等人生も亦時あり、時を待たずして徒に命をすつ、蓋し人生本來の意義ではない。時を待たずして散る花の本意ではない。慾も起すべし、戀も病むべし。怒も生ずるがよい。これ吾等の活動である。所詮のがれがたき約束である。而して始めて人生の眞趣を了する

ことが出來る。其間に何物か得て名くべからずと雖、靈光の一線に觸るゝと共に、云ふに云はれぬ安慰を得て、風吹くなかにも、雨狂ふ時にも、怒の起る時にも、慾の動く時と雖、自ら悠然として中心の不安を感ずることなく、人生の大海に棹さすことが出來る。即ち宗教的一路を辿る人は腹の立つ其中より感謝の一念を以て進み得るのである。慾心の起る其中より報謝の一念を以て進み得るのである。噫願力は無窮也。佛智は無邊也。善も要にあらず。惡も恐るゝに足らず。罪も惱みも一切のもの障る所はない。たゞ報謝の一念、其一念の清き流によりて滯りなく宗教的生活を送ることが出來得るのである。

* * * * * *

修養とは態度を定むることなり

求道學人

精神界五號御讀みなされ候や、その中に「修養とは自分の價値のつけかへなり」との一文まことに面白くよみ申候、姉上にも同じことならむと存じ、平素思ひつきたることを申上ぐべく候、

宗教は自覺なりとの辭は聞きあきたることにはあれど、よく〳〵味へば味ふにつれて有難きことばに候かな。自分の價値の幾何ぞとも思ひつかぬものが、勝れたる法に逢ひまつればとて、そのすぐれたるを知るよしもなかるべく、ましてや劣りたる旨など覺り得べき、さればかの嬰兒の、身に餓を覺えて母の乳房をさぐるが如く、人は自分の價値をさとり、かゝる劣りたるものゞと思ひてこそ、尊き道をのぞみ、德の人につかむとはするなれ、精神界にて、自分の價値を零に見積る所に、初めて如來の救濟胸にいるべきゞと、說かれたるは、まことに面白きことに覺え候、されどかくせんは、思ひきりつる人には得爲すべけれど、何人も出來得べしとは思はれず、ことに姉上の如き、他人よりもすぐれて自負心あつき方などには、かゝるよき道も廻りがたかるべきものと思はれ候、私今迄色々の人に會ひ、信仰の話など試むるにつれて、何故にかゝる篤信の人にして佛の信仰にしかく入り難きやと、思はるゝことも度々有之、同じ道をゆく人の、など彼に平かにして之には岩根こゞしくは感ずらむと思へども、終にさとるべきをりなくて來りつるに、この間中、ふとしたる事にて、こは全く自分の態度をあやまれる爲めなるべしと思ひつき、それよりこれへと考へ至るに、中々面白く糸のもつれを解くらむやうに覺え候。物の譬をとるは私の癖なれど、彼の軍さにゆく者を見玉へ、劒を帶び銃を肩ぐるは、もとより、なほ衣を輕くし、水筒を滿たして、天晴武者ぶり凛々しくゞいでたつなる、こはまこと見易き道理にて、その銃劒を携ふるは身を護り且つ敵を敗らむが爲め、衣を輕くし水を貯ふるは、徒らなる事に身心を勞疲せず、渴きたるときに生命の水を飲まんとてなり、あゝまことよき用意かな、今や皇軍百萬異域にさすらふ、亦この全き用意もていてたてる兵者どもに候、また

かの耗らむとて野に急く農夫に見玉へ上衣の短きはその地の上をひかぬべく、笠の大きやかなるは日輪の猛威を避くるため、肩げたる鍬を頼りに、土くれを碎き、石を除く、彼等の態度の如何に全きかよ、しかるに、顧みて私共を想へば、口には道を求め、學を修むると言へど、宗教の力大なり信仰の門を叩けよと叫べど、果してこれをなすべく、凡ての用意を全くせりや、あゝ耻しや、私共はそれの一つにだ心得ず、況して十全の用意整ふべき理由もなく候、木によりて魚を求むるの愚かなるを、私共の小さき頃より覺えつれど、今の身は、まことに木により淵の魚を羨むにも似たるべきか、家に歸りて網を造くるに如かざるべきを、それをもなさで、徒らに信仰の手に捕へがたきを嘆ち、淵深うして己が手の屆かざるのみをなげくにて候、想ひ起せば花の頃なりし、姉上は己が手をとりて、などわがこゝろの佛陀に逢せざるか、とかきくどきつゝ私の手に涙を落せしことの候ひしが、今よりするに、姉上には一つも求道の用意整はず、信仰の態度をあらため玉はざりしにあらずや、友の人と道の話など爲玉ふにも、ともすれば聲荒らかに罵り合ひて、理も非もなげに自分の說を立てゝ友の言ふを言ひ伏せんとあせり玉ひ、それもすみやかてその人の歸りゆけるあとには、如何にも無念なるが如く唇かみしめて涙を拭き玉ひき、又人の爲なる事に善き事あるをば、特に喜び玉はず、人を惡ざまに言ひて、自ら慰むるが如きさまを、なせるも、その頃に候ひき、忘れもせずある冬の日、學校の友どちと爭ひ、怒りのまゝ友を傷けしことありて、痛く父上を驚かし、その過ちを謝びて來よ、させぬ中は家に入るをば許さずと言はれしをば、如何にしてもあやまるを潔しとせず、一夜を、雪の中に立ちて暮せしをば、却て根氣ありなどゝ獨り思ひさだめて、悔ひもせざりき、一々想ひ出づれは、身に耻かしきことのみさわなり、かゝる身心を提げながら、求道の門を出入すれど、何の詮あるべきや、武器を携へずして戰にのぞめる、鍬を忘れて畠に急ぐと一般信仰の力を握り得ぬこと何の不思議もなかるべく候、

かゝることをば、さかしらだちて言ひつのるやうなれど、之を佛陀の生涯に見玉へな、金枝玉葉の身に在しながら、十九才にして王宮を奔り出て玉ひ、辛酸を嘗め玉へるをば、今までは唯、無常を觀じて世を敢果なみ、かくは爲玉ひしぞとのみ思ひなせしが、愚かなりき、こは佛陀の求道の用意にて候はざりしか、信仰の念やみかたく、衣冠を嘲り、係累を斷たれ、只管無上道を庶幾して、茨生ふ野路をわけ、岩根こゞしき山坂をば雄々しくぞ立ち入り玉ひしにあらずや、又成道後に於ても、再び王城に請すれども、彼處は淸淨なる道場にあらざることをさとして、一度も爲めに止まり玉はず常に樹林にやどり、乞食に生を送り玉へるをば、慈父の膝下を慕ひ、妻子を惜むの心露程もなきやうに、言ひ習はせど、などしからむ、世の人といふ人悉く、正法の輪を外れて、美しきにまとひ、甘きに溺れ、只管安きにつきて絕えて淨土の喜ぶべきを覺る者なきを見玉ひては、身を以て率ゆるも、なほ足はぬべきを知り、生活の爲めに費すべき一切の努力を嘲けり、一向に無上道を渴仰し玉へる有難き態度に候ふらむ、我が老儒の、かゝる極端なる求道的態度を取らずとも、孔子の如き中

道もあるべきに、と申されたるも有之候へども、そはまことに時も處も眼中に置かぬ言と申すべく、傳敎弘法の兩師が、世潮に抗して「女人禁制」の道場をしつらひたるが如く、佛陀のかゝる生涯こそ、私共の喜びても喜ばざるべからざる所なれ、その他經文の中に、無上道を聽き上るときには、その敎師の種性を觀ぜされ、容顏を見ざれ、その非を嫌はざれと、いましめ玉へるも、これ皆求道の者の、先づその用意をなせ、態度を改めよとのことに候はむ、いづれの宗門に於ても、先づ佛法僧の三寶に歸依し上り、しかる後に無上道に耳を傾くるの習なるが、これ等は最も明かなる意義を示すものなるべく候、

私共の習慣にて每年涅槃會の夜にのみ繙くべき經文と、きまり居る、遺敎經の如き、その臨終の御床の上より、懇々いましめ玉へる敎條、まことに求道者の用意これに盡くるを覺え申候、あまり長々しくなり候へど、なほ一事申添へ度きは修養は積功累德なんど申す愚かしきことにあらぬことに候、今迄自力の他力のと、やかましく申されたる姉上には、かく申さばさぞいぶかり玉ふべけれど、決してさにはあらじ、宗敎の上の修養は決してかゝる積み金的なるものにはあらずとぞ存ずる、私も近き頃まで、信仰は佛陀の說きをかれたる法を殘りなく信ずることゝのみ思ひ居りしが、トルストイ翁の書にて、「信念とは人生の意義に對する知識なり」との辭を讀みしこの方、胸の中風吹き徹れる心地して、今は全く、信仰とは敎祖の人格を憧憬するの心なるをさとり、それよりして宗敎の何者たるかをも明らめ申候、嘆異鈔には「よき人の仰せを蒙りて信ずる外には仔細なきなり」と示されたるが如く、私共が慈母の懷に乳房をかみて、安き眠を貪れる日や、まことに何等の掛念もなくて、之を吸ふに甘き露の口の中に滴るものぞと、知れるのみ。その赤子の如く、私共の世に於て、まことよき人に遇ひ上らば、誰か又勞してその御心を斗り、わが身の行末を慮るべきや、身心を任かせたてまつりて、一向に身のつとめ勵むべきのみ、宗敎の信仰はこれに外なく候はむ日夜机に對して書を讀むに當りて、その折々頭をあげて讀書は果して知識を與ふるや否やを疑ひ、又自らの淺學不知なるをなげくものあらむに、人は之を愚なりとして笑はむ、しかりまことに宗敎に於て不信の人とは一善を修しては自己の足跡を顧み一惡に陷りては德行の積み難きをなげくの類に候はずや、かの濱邊に住へる海人の上に見玉へ、七日十日の糧を乘せて、わが夫は冲邊遙かに船出せんとするにその妻や子は、唯甲斐〳〵しげに夫をいで立たせ、父を勵すさまの、如何に平安なるよ、十日の旅と言へば、雲山百里の遠さに行くべく又白浪騷ぐ十里の冲は、こゝよりは見るべくもあらず、されど彼等は、必ずそこに漁場ありて、十日の後にはその獲物を滿載して、間違なく歸り來るべきことを信ずる故に、些の不安もなく、喜びて船出を送るなり、私共の信仰するよき人佛陀は、かくしてかくならせ玉へりといふ信念の身心に鑄込まるればこれやがて信仰の泉をつくるなりこの泉潺々として盡きせざる所に喜びあり勇みあり力あり而して日々夜々の生活は遙かに不安の域を距り疑團の雲を後ろにして信と望と愛との信念界に止住するを得るにて候、その時のさま

を想へば、火の薪油ありて自から燃ゆるが如く、水の源泉ありてとはに流るゝが如く私共の行事は悉く感謝の生活を織りなし、こゝに初めて「悠遠の止住」を人生の上に眺むるに至ることゝ存じ候、しからば何を望み、何をあくがれてか、自ら問ふむ、「悠々として天に從ふにあり」とエマーソンが言へるの境、人こゝに立てば、花開いて芳香四邊に薰ずるが如く、德の美身につき、品性の光り隣人を照すに至るべく候、

いかに姉上、修養の必ずしも自力的ならざるを了し玉はむ、私共は已に求むるの人なり、門を叩くの人なれば、身につけらるゝだけの寶を受け授けらるゝだけの物を得むことを念とすべきのみ、而して右の手より得たる所を左の手より失はざるや、兩の手の如く開かれたる耳は、障害なく美醜の響を傳へて心王に忠勤を致せりや、一つのみ與へられたる口は、果して過大の使役を命ぜられざるや、又つぶらに開ける兩の眼は、果して黑白の分ちを定め利害の區別を透見するか、なほ己が心王は果してよく、身の五官が勵める忠勤を、嘉納して、寬嚴宜しきに叶へりや、更に更におのが宮殿の心王なりと自ら思へるそれこそまこと己れ等の如來にてましますことを忘れざりしや、言ふことあまりに冗長なれども、私共の日常の努力とては、唯これ等の事のみ、自分の体度を定めて日夜に勵むの事のみぞ宗敎的生活のつとめなるべき

いかに覺ぼし玉ふとや、拜具、

五月二十五日雨の夜

＊　＊　＊　＊　＊　＊

南村閑話

一記者

◎今丁度物集高見が歸つた處だが、私が敎務省に居つた頃彼の人はまだ子供のやうに思ふてゐたが、もう六十以上だそうだ。宮內省から金貰ふて辭書こしらへて、又原稿料を取つた人は物集ばかりだ。併しなか〳〵えらい男だよ。

◎今も今とて物集と話した處だが、おまへさんも金が溜まつて結構の事だと云ふた處、ナァに貧だの富だのどうでもよい。罪丸二つあれば何でも出來ると云ふて居た、どこかにえらい處がある。

◎山鹿素行の學問が當時の世にいれられぬ爲め、淺野內匠頭に御預けとなつた。やがて江戸より播州赤穗に移さるゝとなり、其前夜淺野の家臣が素行の處へ來て云ふには。今度愈々赤穗へ參らるゝに就て、何か殘し置かるべきものはなきやと慇懃に述べたれば。素行は徐に、さればなり、門を出れば還るを忘るゝは丈夫たるものゝ覺悟である。私はこれ位の用意はして居る、今更門弟などに殘し置くべきものはないと云はれた爲め、家臣感に打たれ退いたとの話がある。人は平生の覺悟が第一である。

◎律僧の和田智滿は智者ならば、雲照はまあ愚者だ。

◎安心がまた一斗（一統）にならぬゆゑ、東は九州（東本願寺の口稱騷動）西は三合（西本願寺の三業騷動を云ふ）と云ふ狂歌あるが。三業騷動の記錄は今にも社寺局に殘りてゐるが、非常の騷動のやうてあつた。

◎說文も馬鹿にはならむ、男女の關係をば夫婦と云ひ、鳥にありては雌雄と云ひ、獸類にては牝牡と云ふて、皆それ〳〵の道理があるやうである。

◎孔子は性相近く習ひ遠しと云はれ、未だ善とも惡とも云はない。孟子は之を受けて性善なりと云はれ、其後揚子や、荀子や出て、善でもあらず、惡でもあらず、或は善惡混合なりと種々の說を立てゝ居るが。何れも最もの事である、私が思ふには人の性は水の低きに就くが如く、善の方面に漸々傾くものと思はる。

◎古來英傑と云はるゝ士でも、始めより大望のあるものは尠ないやうである。豐臣秀吉でさへ天下を取らふとは夢にも思はなかつたらしい。其羽柴と姓をつけたのも僅に丹羽、柴田位の處で終りたい位であつた。維新の三傑と云はれた大久保と雖も、もと〳〵大志のあつたわけではない。十九歲にして京都に出て、二十二歲にして江戸に出てたが、最初の目的は島津家をして九州探題たらしむる位であつたらしい。然るに平野國臣の薩國事に奔走するを見て、所謂志士の列に加はり後ち遂に天下の政治に參與するやうになつたが、畢竟時勢の寵運兒たるを免れない。

◎併し大久保はなか〳〵豪傑だよ。廢藩置縣なども全く大久保の方寸より出たそうである。或高家の如きは諸侯になる積てあつたそうだ。

◎大久保は志を得て後ち人に語りて曰く。おれ共が死なねば迚もほんとうの日本になれないと云はれたろうだ。實際元老共が生き殘りて口を出すやうでは、日本の進步も覺束ない話である。

◎大久保が途に島田三郎に要擊されむとするとき、大喝一聲コラ待てと云はれたそうだが。膽力もしつかりしたものだ。

◎長州人の前には藝者の事は云へぬが、もと〳〵木戸が俺を作つたものである。元來木戸は情にあつい人で、自分がひどく世話になつたものだから、三本木の藝者を妻にしたのである。それから長三洲も、伊藤も藝者を女房にするやうになつた。

◎伊藤の事は世間色々の評あるが、彼も亦多少世の人と異なつた點もある。彼がまだ士分に列せざるとき、木戸彼に謂て曰く。汝も早く士分になるがよいと、伊藤は直に私は士分になりません、大名になりますと答へたと云ふ話がある。これ好個の立志談である。

◎一体好色なども何肉周妻と云ふ事もあるから、其人の本性によるやうである。彼の天台唯一の學者であつた慈本老僧でも、私の遇ふた時はすでに七十歲以上であつたが、傍に若き比丘尼が侍して居つた。此人の書いた詩を持つて居るが、書も屈托なく若々しい處があつて、なか〳〵甘いものだ。詩に曰く。

快受北窓涼。高然臥一牀。風吹松葉々。聲似水蕩々。支枕奇峰出。遣懷塵念意。憐看門外路。人馬暑中忙。

◎榮根譚は川柳のやうなもの、深く味ふべきものではない。

◎相摸太郎も贈從一位となつたが、或人が像を見て來て法体であるとて驚いて居つた。驚くに及ばぬ。九條家などの虫干の時御覽なさい。代々皆法体の姿である。關白道長が參內の

時に伴僧六人を連れたといふ話もある。當時佛敎の勢力と云ふものはすさまじきものであつた。

◎已に法王（孝謙上皇の事也）あり豈法臣なからむやとて、道鏡をば執政の職に引上げた。史家道鏡をば惡逆無道の如くあしざまに云ふは、あまり信じられぬ事である。

◎僧侶が葬祭を司ることになつたは德川時代の事で、其以前にはなかつたのである。德川時代になつて外敎を防く爲め何某は何々寺の檀家の名稱の下に必ず附屬せねばならぬやうになつた。所謂寺は戶籍を司り旅行免狀抔も寺より出で、死人あれば法名を貰ひ葬祭を受くることゝなり、僧侶の本職は全く葬式を司るやうになつた。

◎延秀の薦士錄に凡そ六十人の人物を擧げて短評を加えてあるが、所謂寸鐵殺人底の妙がある。これ時の丞相の問に應して言下に答へたもので、誰も有用の人物は記憶して置く必要がある。彼の論、孟の四書の初めに加へらる大學中庸を編したる朱熹の評を一例として此に擧けて見やう。原文のまゝが却て興味がある。

學傳二程一。才雄二一世一。雖下賦性近二於狷介一。臨レ事過中於果銳上。若處以儒學之官。涵養成就。必爲二異才一。

其祝禹圭を評するに、氣節正方、議論毅挺の八字あり。亦簡にして明。能く其人の眞面目を窺ふとが出來る、

◎戰爭の爲め若後家が澤山出來る、可愛想である。やれ平和だの、正義だのいふても、要する所三毒の發動に過きぬ。淺ましき事である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

北窓隨筆

三日齋

人格の感化——ニコライの鐘——仁齋の敎育——東涯の戰爭觀——何やかや

◎德川時代は儒學隆盛の時代で又學者もなか〳〵夥しい、其中で一種異彩を放つ人が二人ある、即藤樹先生と古學先生とである、者し學問の優劣や、氣力の强弱を論じたならば遙かに此二先生を凌ぐ人に乏しくはない。然れども其人品といひ、其道德といひ此二先生より以上の人は殆んどなかろう、人格の感化力は實に偉大なものである。

◎今年は古學先生の死後二百年目である、此二百年目に、日本は今露國と戰を交へて居る。戰爭より外に我等は何事も話すとが出來ぬか、否戰爭中であるから殊に此人を讀者に紹介する必要がある、日本は二百年以前の敎育家より隱然受けた感化を今や世界に表示せねばならぬ。

◎藤樹先生を日本のソクラテスとでもいはゞ古學先生を假に日本のベスタロッチーとでも言はうか、藤樹先生の門下に蒂山の如き人才を生じた事と、古學先生の子に東涯の如き溫厚の君子を生じた事は兎に角注目すべきとである。

◎藤樹先生は古學先生より更に五十七年を遡つて其事蹟を尋ねばならぬ、先生の事は之を他日に讓つて二百年祭紀念のために暫く古學先生の事を話さして貰いたい。

◎古學先生とは言ふまでもなく伊藤仁齋先生のとである、先

哲叢談を開て其行狀を考ふる時は其容貌風采、性格に至るまで眼前に見るやうてある。

邦俗立春前一夕、撒二炒豆一、高聲叫曰、福内鬼外、殆不レ類二兒戲一乎、而仁齋必著二禮服一行二之家一、其不二好爲二崖異一者如レ此。

* * * * * * *

嘗率二門人數輩一徜徉焚刹一見レ佛即拜、門人不レ悅曰、先生恒力辨二釋氏之非一而今拜二其像一者何也、仁齋曰、釋誠與レ儒異、然而過二其地一不レ禮二其主一可乎。

◎仁齋には佛法は嫌てある、嫌てあつたけれども寺へ參詣した時は必禮拜して歸る、是は主人に禮をして歸るのと同じとてあるといふ意見である、多くの儒者は木像の頭でも引き拔かんばかりの狹量なものばかりてあるのに、獨り仁齋が佛像を拜して行くといふによりて既に其度量の大きく、又其性質の溫厚なとがわかるではないか。

◎二百年前の敎育家より一般に敎へられたとは此一事てある若し此意味を擴張したならば、佛敎者が耶蘇の像を拜しても孔子の像を祭つても差支はない、或場合には福内鬼外といふてもよかろう、日本國民が「ニコライ」敎會堂を初め露國のハリスト敎に對して敬意を表するのは仁齋先生といふ大きな敎育家の御蔭じや、耶蘇敎の人でもそうてはないか、無暗に佛敎は偶像敎であるなどと云ふて演壇の上で佛像の頭をはる樣なとをせんでもよかろう、又御聖影に對して頭を下げぬといふ樣な頑固なとをせんでもよかろうじやないか。

◎私は佛敎信者である、されど仁齋先生が排佛家でありながら佛を拜したといふとに非常に感じて、佛敎徒が他に對し就中、耶蘇敎に對しても相當の禮を盡すべきとを至當と考へ、敎會堂に石をほり込むといふ樣な事は決して爲してはならぬと思ふ、私ばかりでない、恐く敎育を受けた人は同一の意見てあろうと思ふ。

◎露國は頻りに黃色禍とか又は宗敎が異る點をかつぎ出して頻りに日本の惡口をいふて歐米人を同種同敎の人として共に露國に同情を寄する樣つとめて居るそうてある、日本國民は過去三十餘年の間には時として耶蘇敎を排斥したともある、併しながら其排斥せらるゝ所以は、寧ろ耶蘇敎自らが日本に同化し得なかつたによることは一般の意見てある、されば罪は排斥するものになくして却て排斥せられた耶蘇敎徒自らにあつたと思ふ。

◎安寧秩序を害せない限りは耶蘇敎徒は日本に傳敎の自由を有して居る、宗敎の相違して居る爲に日本が今回の戰爭を開いたのてあるとは單に露國が政略的に言ひふらしたのてあるから、早くも心ある米國人などにはよし露國は基督敎を信ずれども、其國民は既に基督敎の精神に相違して居るといひ、又は神の心に違つた希臘敎を信じて居るから、眞の基督敎徒てないと言ふて居る人もある。

◎安心して頂きたい日本は無暗に異敎徒を迫害する樣な野蠻國てない、是は外國人に對して公然確實に保證して申すのである。

◎併しながら日本國に籍を置く佛敎徒として、たつた一言、

私の意見を申して置く、我々は「日露の戰爭は佛耶の戰爭なり」といふ樣な考を持つものではない、去りながら日本は露國に戰爭で勝つても、ニコライ敎會堂の鐘が駿河臺に鳴り響く間は、少くとも精神上に負けて居るのてあるまいか。

◎日露の戰爭で最も悅んだものは駿河臺にある病院の患者て彼等はガン〳〵と鳴る八釜しき敎會堂の鐘の聲を聞かん樣になつて非常に喜んで居るといふが、私も此點に於ては病人の一人てある、私は平和克復の曉、又も破れ鐘が、ガン〳〵と鳴りはせぬかと心配して居る、私は病人の代表者として小村外務大臣に嘆願する、平和克復の談判の時は其條件としてハリスト敎を傳ふるとは妨げないが、どうかニコライの鐘だけは鳴らさぬ樣に、一箇條の條約を附加して頂きたい、どうもあの鐘の音だけは未來永劫聞きたくない、是は私が病人として願つて置くのてある。

◎健康者としてはもう少し氣の利いたとも言ふて見る

仁齋が送二浮屠道香師一序に曰く

夫れ學者より之を見れば固より儒あり佛あり、天地より之を見れば本と儒なし佛なし唯、其れ一道のみ所謂道といふもの即ち天地の公道にして一人の得て私する所に非す聖人と雖も能く之れを損益することなきなり

凡て一人にて私するといふことがよくない、宗旨より見れば固より佛あり耶あり、されど人道に變りのある筈はない又平和を希望せざるものはない、故に宗敎としては基督敎徒も佛敎徒も皆一日も早く平和の克復を祈るより外はない。

◎先哲叢談の中に伊藤仁齋の遺業を繼ぎたる其子東涯に就き面白き話を傳へて居る

山崎闇齋嘗問二群弟子一曰、方今彼邦、以二孔子一爲二大將一、孟子爲二副將一、率二騎數萬一、來攻二我邦一、則吾黨學二孔孟之道一者、爲二之如何一、弟子咸不レ能レ答、曰、小子不レ知レ所レ爲、願聞二其說一、曰、不幸若逢二此危一則吾黨身被レ堅手執レ銳、與レ之一戰擒二孔孟一以報二國恩一、此即孔孟之道也、後弟子見二伊藤東涯一、告以二此言一、且曰、如二吾闇齋先生一、可レ謂、通二聖人之旨一矣、不レ然、安得下能明二此深義一而爲中之說上乎、東涯微笑曰

「子幸不以孔孟之攻我邦爲念予保無之」

◎闇齋と東涯と二人の人格が自ら現はれて居る、闇齋が奇言を吐き門弟子を驚かし、孔孟の道にかぶれて一國の大事をも知らぬ弟子共に一打擊を加へたのは實に面白い、耶蘇敎徒殊に希臘敎徒などは十字の記號をつけた「ツアール」の軍に對しては必ず發砲し得ぬような連中ばかりてあろう、基督敎徒の中にも、せめては基督や「ルーテル」を擒にし露帝や黑鳩公を捕へて以て國恩に報ぜんといふことの出來る人物が一人でもありそうなものじやが、それが無いのは少々臭いじやないか、僞善でもよいから。

耶蘇敎徒の方から一言、山崎闇齋流の言を聞かして貰いたい、さすれば私は安心しますよ。

◎闇齋には闇齋の特色あり、東涯には東涯の特色あり、東涯に至ては更に一段高い氣品が見へるてはないか、心配するい。

な、孔子や孟子は日本を攻めに來るような人じやないよ、僕は保證する」と微笑して答へたのだ、何と言ふに言はれぬ味があるじやないか。

佛敎徒ならば「釋迦や善導大師は日本を攻めに來るような人じやないからそんなことは心配せんでもよいよ」といふべきである、釋迦や、親鸞上人を「クロパトキン」や「マカロフ」と同一に考へて貰ふては困る。

◎いや、こんな消極的の人物が居るから國が弱くなるのだといふ人もあるか知らぬが、人には各、天職ありと思ひ玉へ、世の中皆金モールや勳章やピカ〳〵したものばかりになつては溜つたものではない、時にはこんなものを見ると土芥の如き人物のあるとも非常に必要じや、人を救ふの天職を持て生れたものもあれば、國を守るの天職を持て生れたものもあるといふことを能く心得て貰いたい。

◎戰爭して國に盡さんと思ふ人は奮て從軍して國に盡せ、戰はずして國に盡さんと思ふ人は從軍せなくても國に盡すとが出來る、今に至て何やかや理屈ばかり言ふて居る奴が眞に譯のわからぬ露犬じや、彼等は只吠ゆるばかりじや、一つ三十棒振り廻してやれ。

◎東涯曰く。

譽望を求め聞達を務むるは聖人の戒むる所、然れども君子は、終身名の稱せられざるを惡む、故に名を好むの弊、之を中人以上に責むべし、之を中人以下に責むべからず、中人以下は名聞を以て之を勵まして可なり。

味ふべき言ならずや。

又曰く。

利苟も就くべからず、害苟も避くべからず、故に其道を以てせざれば千駟の富も受けざる所あらん、苟も其道を以てすれば斧鑕の慘も辭せざる所あらん、

嗚呼男子須く這般の心得なかるべからずだ。

◎東涯又曰く。

一時の毀譽は信ずべからざるなり、萬世の褒貶は欺くべからざるなり、衆人の好惡は恃むべからざるなり、君子の是非は罔ふべからざるなり、故に事、之を久遠に驗して違はず、之を君子に質して謬らず、而して後以て其實を知るべきのみ、是を以て一時以て是となさずと雖萬世以て是となすものは隱德の君子なり、一時以て非となさずと雖も萬世以て非となすものは名を衒ふの小人なり

昨日は金時計を賣つた者が賢者と呼ばれ、今日は却て惡者と呼ばる、世論は大抵此の通りである、唯夫れ一時の毀譽に重きを置かず、自若として自己の天職を盡さねばならぬ、其道愈〻大なれば之を譏るもの愈〻多く、其德愈〻邵ければ之に冦するもの愈〻深し、一時の是非褒貶は如何にあるも、人の誠心よりなした事は遂に必ず人を感ぜしむるに定つて居る。

◎露國のトルストイ伯は其著書一千種を書店に托し、其利益は悉く之を從軍者遺族扶助料に寄附することに決したりと彼は常に戰爭の罪惡を說て居る、然るに彼が從軍者の遺族に扶助料を與ふるは、事實戰爭を奬勵するものなりといふものがある、思ふに戰爭は惡むべく恐るべきものである、

去りながら、二三政事家の過りたる政策の爲に戰はねばならぬこととなつた露國軍人の遺族こそ憐むべきものである彼が平生露國の政府に反對し又は露國の敎會に反對しながら此義舉をなしたのは聊か矛盾の樣に見ゆるけれども、靜かに之を考ふる時は、是れ彼が蒼生を憐むの同情より出てたものに相違ない、露國は大なれども小なり、然れどもトルストイは小なれども大なり、トルストイの人物は今や露國よりも遙かに大なるものとなつた。

◎此事は四月二十八日の萬朝報にも出て居た、實に今日は戰爭が善いか惡いかそんなことを言ふべき時でない、一人でも救ひ一人でも助け、一人でも慰めることである、戰爭の影響を受けて苦んで居るものは、商人や呉服屋や、大工や、勞働者ばかりでない、實に至る所、甚しき苦痛を感じて居る者がある、恤兵や、軍資献納や、遺族の救護は恐れてはならぬ大切なことであるが、同時に日本國民特有の陰德を盛んに發揮して蔭へまわつて助けてやつて貰いたい。

◎是は餘計なことだが小田原十字町ハリストス敎會堂を襲擊したとか云ふことがあつて、是は定めて佛敎徒でもやつたものだろうと云ふ噂さがあつた、然るに事實は一醉漢が敎會牧師の宅を料理屋と間違へ、戸を叩いたのを、牧師は時節柄、暴徒の襲來したるものと思ひ、其家の書生が棍棒て醉漢を毆打したので、此に喧嘩の花が咲いたのじやそうだ。

◎然るに內務省は殊にビックリ遊され、希臘敎徒といへども忠君愛國の士に乏しからず、佛敎徒皆仁人義士なりといふべからずなど〻云ふ風の御說で、天帝を罵詈し、又は希臘敎徒を迫害しては、耶蘇敎國民の感情を害するとて、度々訓令を下されたとは何と用意周到なことではないか。

◎過ぎたるは及ばざるに若かず、敵國人を親切にせよといふより、三等の瀛車に乘じて露國の捕虜を奉迎したる知事は禮の過ぎたるものである、埼玉縣にて戰爭ごつこで、小兒露將となりて捕虜となり切腹の眞似をなし遂に重傷を負ひたりといふは戰爭熱の過ぎたるものである、石油は輸入品なれば之を消費するは日本正貨の流出を來す恐ありとて、夜中火を點ぜず、黃昏に至れば皆寐に就く村落ありといふは勸儉奬勵の過ぎたるものにて、田舍には妙な經濟論者あることも分る、此の如く過ぎたる弊、今や增大し來つた、實に及ばざるに若かずとは此等の事であろうか。

◎どうも今日の人は理が勝て行に薄く、それて學問が死んでしまつて、又人に取ることを樂まない、宜しく古學先生の訓誡を見て味ふべきである。

風尚餘韻

新世帶

（一）　わけもなくうれし　それがし

「新世帶にて昨今の心的狀態は如何にや」との御尋ね、心理學者ならぬ吾は、「心的狀態」など云ふいかめしき意識の事は

存じ申さず候へども、強ひて申上候はゞ、學兄の「先刻御存知の通り」と申すべきか。そは余りすねたりとならば、たゞ「わけもなく嘻しうこそ」と云はまほし。

たゞ「わけもなくうれし」と云へばとて、彼のうら若き徒が青春の夢路を辿るとは、些かことなり申候。元よりロミォとジュリエットとが、紫雲の靉く戀路に浮かれしとも、ことなり申候。必ずしもヘーゲルの流を汲むにはあらねど、やゝ理性の發達致候吾等に於いては、初戀の耻しさを脱し、理性を以て感性を批判し、「若き妻」の長所をも、短所をも知りぬいて、なほ且つ、一種えも云はぬ情緒の、油然として湧き來るもの、此れを大調和と云ひ、アウフクレールングと云はゞ、此の大樂園を得たる刹那ころ、眞にわけもなくうれしき樂境にて、春風習々として、心の花も今盛に候。久方の光のどけき春の日も、此れには若かじところ覺え待べれ。藍田日暖にして玉烟を生ずる心地に候。スキートの情趣今こそ玩味致候。

申すまでもなく、新婦は理想の佳人に候はねど、月下氷人を通して、出雲の神の結び給ひし緣なれば、定まれる良緣とこそ存ずべけれ。ポルシャ、テリッサの才なきも、人格賤しからず、立居擧動もしとやかにて其の從順なるは鳩の如く、其の柔和なる眼は羊のそれの如く、

"Not a drop of her blood was human,
But she was made like a soft, sweet woman"

たるに至りては、毫も遺憾無之候。緣は異なもの味なものにて、吾等が如き不思議の結婚を致候ものは、今更ながら運命の計りかたきに驚きて、眞理の存する所を闡明致居候が、兄等は此れを「佛の慈悲」とのたまふべし。我も佳偶の天成なるを信ずる者に候。

（三）獅子身中の蟲

四十未だ家を爲さずと高き理想を趁ひし昔は知らず、樂しき家庭を造りし今日此頃は、高擧樓上寒床に臥したる、獨身十年の昔をかしや。

「行つていらつしやえ」、「おかいんなさい」も、ほんの口先にて鵬鵡にだも若かざる機械的の挨拶と、門の戸の開くや否や、恭しく且つこぼるゝ許りの愛嬌もて迎へ、又帽をさゝげ、下駄を直して送らるとは、快不快は云はてもの事なるべし。襄底を拂うて僅かに一斤の牛豚に舌打鳴す書生より、葱砂糖醤油なとの雜物にて、殆んど二倍の價を貪り、石油炭を高價に賣付け、物價高直を名として、室代食料を上げ、郵便切手の外、端書の外、あらゆる物よりコンミッションをとり、而も公然の秘密なるかの如く、粗食を食はせ、客扱を惡しくし、平氣の平左なるは、誠に度し難き者に候。世に惡むべき罪惡を犯すものありとせば、將來國家の干城と爲り、棟梁と爲り、柱石と爲り、はた鹽と爲り、靈のパンと爲るべき有爲の書生の血を吸ふ者こそ、實に獅子身中の蟲なれ。社會改良家は先づ下宿屋改良より着手せよ、宗教家も亦下宿屋の神さんを濟度せよ、コンミッションを取る下女を濟度せよ、下婢問題は必ずしも米國特有の問題にあらず。

朝は味噌汁と豆か、海苔。韮は年が年中「さば」と相場のきまり候下宿屋のよりは、貧しけれども新世帶の料理は結構に御座候。四季折々の變れる者珍らしき者は申すまでもなく、

己が口にかなひし者を撰擇するを得るは、下宿料理の千篇一律なるとは雲泥の差有之候。下宿腹の下痢せぬ用心は、新世帶の家憲に加ふべきにや。

（三）女子は必ず周緻なりや

婚姻論に財夷房之道と確信する吾等は、富家の女をめとりし者には無之候。されば繭籠こもれる妹は、絲窓の人に候ひしなり。元より料理の達人には無之候。一事目には必ず古書を引き、二事目には必ず星嚴紅蘭を御引合に出し給ふ三輪田女史の「女子の本分」に云はく。「抑、男子は天性、粗野のものなり、女子は周緻のものなり。されば其の性を利用するは天の道にして即ち女子の道なり」と。げにも大別すれば男子は粗笨にして、女子は周緻なるべきも、人間に賢不肖あり、天性に精粗あり、年齡に老若あり、學校に大小あり、趣味に高下あるを知らば、女子は必ず周緻、男子は必ず粗野とは申されまじ。女子に井口あぐりあり、奥村五百子あり、男子に赤堀峯翁あり、渡邊辰五郎ありて、女子は必ずしも周緻ならねばこそ「若き妻」にして、家具の取扱、奴婢の使役より、客室寢室の整頓掃除まで悉く辨へ、茶碗の破目なく、揃の膳椀を足らなくせず、土藏の戸締まり、裏口の錠前を忘れず、玄關雪隱に蜘蛛の巣を張らせず、水瓶、昆爐の掃除、火の焚き鹽梅を心得たるは少く候へ。

まして米の値段を知らず、新聞の小賣相場と何程の差あるかをも知らず、堅炭佐倉炭がさ炭の別をも知らず　筍、大根などの切樣より、汁の盛方、出入の商人のよしあしなどにも心付きて、女藝の凡へてを心得たるは少なかるにや。世間往々にして細君を米食蟲と云ふ。世に周緻ならぬ、不性者多き證據に候。女子は必ず周緻ならず、器用ならず、利巧ならず、たゞ〳〵若き男の胸に情化し美化して。天女の如く思ふのみ。

（四）家の歌

天にあつては比翼の鳥と爲り、地にあつては連理の枝と爲らんと誓ひ、鴛鴦の屏風の蝶違のしばし離れぬなからひも、流るゝ月日に關守なく、蜜月の夢さめ候ては、梅も馴るれば香が薄き習、目についた女房も鼻につくころ是非なけれ。

或經驗家の話に、結婚の夜以來、新婦に如何なる短所あるかと、其の欠點をのみ瞰み居たるに、妻も心ひがみて、夫に遠慮し、夫のあらをのみ探し、情味索然たるに及んで、叱咤し譴責するも及はず。されば蜜月の間は、先づ新婦の長所美所を見よと。味ある言に候はずや。

我等聖人に候はねば、我儘の念きざし、新婦のあらを見ては、流石につまらなき心地の致候を、かゝる折には「家の歌」を口ずさみ居り候。國に國歌あり、校に校歌あらば、家に「家の歌」あるべきに候。歌は題して「歸北の歌」と申候、其の中

我は浮世にさすらひて
しばし「情」に遠ざかり
駝鳥に乘りて沙漠ゆく
寂しき旅客に似たりしを
今綠島にあへばなり。

「涙の谷」か人の世は

慈悲の情の父母の
膝を離れて二十年
旅にやつれし人の子の
胸の思は誰か知る

まこと浮世は戰の
衢にこそは似たりけれ
刀折矢さへ盡き果てし
手負手傷の人の子よ
泣くな、世に赤十字

「情の泉」底深う
あふれ出てにし少女子が
厚き看護のなかりせば
世に人道は輝かじ
我、野ざらしの意氣あれど

嗚呼流落に飽きし身の
今し「情に」逢はんとて
都を出づる其の夕
君がうつしゑ出し見て
熱き涙を灑ぐかな

あはれ「うれしの我が熱涙」
凝りて天使と爲れよかし

天使と爲らば天がけり
北にみ空を三百里
行きて「情」に告げよかし

「我は雁、春霞
霞たなびく輕川の
朝の空に鳴く時は
都の花に背くとも
喜、胸にあふるゝを

あはれ我等が行末に
神よ榮を垂れ給へ
あはれ我等が行末に
人よ和樂を希へかし
世は波風の荒くとも

など云ふもの有之候。愛のうすらぎ候折、此の「家の歌」を一誦すれば、金聲玉振の佳調なきも思は遠く興亦深し、更に荆妻の作「門出」の一篇有之候へども、わざとひかへ申候。

（五）修　養

吾は經驗家の說の如く、新婦の美所長所を認め候へども、之れも拜芝に讓りて、わざと控へ申候。

夫の愛情をつなぐ方法とて、第一形を端正にし、第二言語をやさしくし、第三行を方正にし、第四意を誠にすべしと敎ふる女禮式の著者は、今一段家政に心をそゝぎて、具象的に云ひあらはすべきに候はずや。

吾はかく實用的ならしめ、家政の注意を與へ、小遣帳を附けさせ、さて後、歌集などを繙き、

我妹子を大和にやるとさよふけてあかつき露に我が立ちぬれぬ

皆人をねとの鐘は打ちたれど、君をしもへばいねがてぬかも

を始め歷代の名歌を吟ずれば、目に見えぬ鬼神さへ和らぎ給ふ和歌なるを、まして新世帶は、此等の秀逸によりて和らげられぬ理やある。

所謂國文にて敎育せられたる女子は、心の修養に乏しく、信念なきは勿論の事、新知識なきが多し。されば花婿は、花嫁に精神的修養を與へ、之れを導き、之れを感化せんとて、哲人の家庭の談話を爲し、又は詩人、宗敎家の信念に就いて語り、施いては時代思潮の那邊にありやをも物語りて、蛙鳴く寂しき夜半を過し候事も有之候。畏耶和華之寅畏乃知識之本、惟愚人貌智慧與訓焉。我子歟宜聽爾父之訓母離爾母之法。蓋此爲美飾於爾首爲索於爾項。の句。如來以無盡大悲矜哀三界所以出興於世光闡道敎、欲拯群萌悉以眞實之利の理など語らひ居り申候。

（六）大打擊

「吾が敵は花嫁の不在に乘じて、白晝公然恣に我が防衛地を狙ひ、我等が衣服と日用品とを掠奪し去れり」と、露皇と同じく絕叫すべき時は來にけり。敵は雲と消え、霞と去りぬ。「我が警察が鼠賊に對して、百倍の酬復を爲し得るか否か」、君よ新世帶の煩悶は始まりぬ。夏をも待たで心火は燃えんとすなり。盜は空巢を狙ひて、目星しき品物十有九點を奪去り申候。不整勝なる新世帶より、目星しき十有九點を去れば餘す所は唯元の木阿彌のみ、

此は新世帶に對する一大打擊に候。愕然として女大學、女中庸女誡の類を始め、何某女史、くれかし刀自の家政學類を繙き候へども、未だ盜賊に對する注意は御座なく候。君よ學識あり、才幹あり巧辯ある女子よりも、まづ泥捧の用心を爲し、空巢狙に注意し、萬心づきてまめなるとこそ、いみじき「若き妻」と申すべけれ。火の用心、泥捧の用心を爲し、神佛を信じて、小供を泣かせぬ者こそ望ましけれ。新世帶は花婿花嫁の不注意よりして、一大打擊に會ひ申候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

釋尊の降誕

道交會

み輅（くるま）かへす春姫の
かたみの袖か、ふか碧
空うらゝかに渡る日の
雪山の雪にてりはえて

霞も香る藍毘尼の
園、錯落の花の床
大聖こゝに生れまして
紫雲聲あり天の樂

周行七歩なべて世の
病める老いたる悲しめる
一切衆生救はむの
大慈大悲の御誓

讃嘆、隨喜、歡樂の
呼吸ににほふ大地や
天降る蓮華の一瓣ごと
天地てらす光明あり

あゝ法流のとこしへに
涸れすにごらじ三千年
流れゆまに浴む子の
清きまどゐの此筵

ことほがむかなもろ〳〵の
聖なるものをさゝげつゝ
大聖釋迦の生れましし
四月八日の靈の日を

＊　＊　＊　＊　＊

憂　愁

風琴生（寄）

偽り多き末の世に
魔の群れ猛り狂ひて
正義の旗は終に裂かれぬ。

かくて世は荊棘の闇となり
肉身そが刃に傷て
苦悶に泣くはらから。

人そが悲愁の涙なく
たゝ己がゆくに安きを願ひ
强鞭にたほるもかへりみず。

あゝかくも汚れし人の世
われむしろすてゝ
たゝ清き野に笑まん哉

み空の青き新星の
さゝやく如くひかりては
神秘の慰問あるものを。

聖者の小甕（たか）のこぼれては
咲くなる花の崇高さよ
結べる露の美酒に
嗚呼誦せんかな歡樂の詩。

＊　＊　＊　＊　＊

夏の句

夢弦（寄）

時鳥山角月を吐かんとす
陣營や雨の螢の近く飛ぶ
江頭の闇に亂るゝ螢かな

新刊紹介

◎聖德太子傳

境野哲著

世に太子の傳多し、然れども其眞面目を發揮したるもの尠なし。たとへ眞面目を描き得たりとするも徒に奇蹟を擧げて稱讃したるに過ぎざる也。太子は慥に一代の偉人也。文化を促し、政治を改革し、佛教の擴張を圖りたる、豈凡庸の士の及ぶ所ならむや。宜哉後世太子を稱して菩薩の化身なりとするをや。本書太子の傳を記すること精にして詳、正すべきことを正たし、非は飽まで非とし勉めて奇蹟を排斥せられたり、一々考證に訴へ其由來する所を明にせり。勿論獨斷の弊ありと雖、遺憾なく太子の事蹟を發揮せられたるものと云ふべし。然れども考證に過ぐるの弊や偉人としての太子の面目を窺ふに於て稍々足らざる所あるが如し。著者は瑣末の事まで論及し、寧ろ讀者をして不思議に感ぜしむることあり。十七憲法は法律なりや否やの如き今を以て古を律す、固より論議の限にあらざるべしと思ふ。而して一面より見れば著者の本書に忠實なる所以を知るに足る。

殊に本書に於て太子を中心としたる、當時の事蹟を詳論したるは、著者の吏眼尋常ならざるを見るべし。本書の最後に於て著者は太子の面目を最も明白に抽きて曰く。

あの透額の妙な古風の冠、あのうりのない眞直な刀、どうしても之から新鮮なと云ふ考は出て來ない。ところが余が頭には此太子が如何にも新鋭の氣の充ち滿ちた、しかも大陸の新文明の崇拜者で新學問、道德新の鼓吹者であつた、若々しい狀態として鮮かに映ず來るのである。最も吾人の心を得たるものと云ふべし。

言文一致の筆はよく言はんとする所を述ぶるには可なりと雖、冗漫の弊あり、著者の言文一致は比較的無難なり。著者の健筆亦本書に於て見ることを得たり。嗚呼太子は一代の偉人也。之が事跡本書によりて遺憾なく叙せられたり。吾人は深く著者の勞を多とする者也。（四十五錢　本郷文明堂）

◎王陽明詳傳

文學士　高瀨武次郎著

著者陽明先生を論して曰く、先生の氣力の豪健なるは是れ其意志の堅固なるにあらざるか、思想深邃、武略縱横なるは是れ其智力の卓越なるに由るにあらざるか、共に語るもの之に感奮し、相接するもの之に悅服するは是れ其熱情の發して言語眉睫の間に表はるゝに由るにあらざるか、と。以て智と、意と、情を兼ね備ふるもの陽明先生の偉大なる人格なりとせり。所謂偉人とは先生に冠する最も適する名詞にあらざるか。朱子學と陽明學とは德川時代の思想界に於ける二大潮流と云ふも過言ならト。其知行合一の金言は如何に邦人の頭腦を支配したるかは敢て論するまでもなし。著者、今此偉人の傳を叙述して、陽明先生の一生涯を通して、多趣にして最も變化に富む一代の行蹟を詳にせらる。簡にして明、先生の性格躍如として紙上にあらはる。殊に朱子學と陽明學と對照して其學說を述べられたる、用意周到にして、且つ參考書類を擧げたる如きは、後學者の便を得ること大なりとす。人は滔々として物質界に趁るの時。本書の出つる、豈世道に裨益する所尠なしとせんや。行文亦健にして、雖述の句なきは喜ふべし。近來の好著として之を推すに憚らざる也。（定價七十五錢　本郷文明堂）

◎露西亞暗黑史

澁江保著

暗黑界の露國を寫して痛快骨に徹す。聊か際物的の感ありと雖、一讀するの價値あり。（定價四十錢　本郷文明堂）

◎はなしの園

家庭社同人編

家庭の娛樂を主としたる小品の物語をあつめたるもの、一種の氣韻を存していふべからざる清香を放つ。此はなしの園には四季折々のめでたき花あり。淑女諸君の訪ひ玉むことを望む。

◎エピクテタスの教訓

稻葉昌丸譯

清澤先生の亡き日は周り來りぬ。先生が生前愛讀せられたるエピクテタスの書をば、今亡き先生の親しき友なる稻葉氏の手によりて紀念として譯せられたるもの、本書を通讀してどことなく先生の偉を忍ぶの思あり。先生曾て四洋第一の書として本書に題せられたり。以て如何に本書を愛讀玩味せられたるかを知るに足る。エピクテタスの教訓はげに利劍の如し。世の人よ其心して讀み玉ふべき也。（二十錢　本郷浩々洞）

◎指環の魔力

巖谷小波編

世界お伽噺の第五十七編として出づ。表紙繪の美しきと、內容の趣味多き物語と相待ちて。渾然として教訓の錦を織りなす。動物虐待防止の意味も含まれてうれし。筋書をいはざる方却て讀者の樂を增すべきか。（八錢　東京博文館）

◎健腦法

坂田實著

讀て多少の裨益あるべし、評者は未だ之を試みざる也。（十五錢　本郷文明堂）

◎栴檀香風會

日宗中檀林の發行にして、うが研究の學術を忠實に發表したるもの、世の片々たる小册子の比にあらず。日宗の學風大に見るべきものあり。

政教時報

○日曜講話

▲五月一日（第十五回）　曾我量深氏は內賢外愚の演題にて親鸞聖人は賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はす、賢者の信は內賢にして外は愚なり、愚禿が心は內愚にして外は賢なりと云ふ意味を敷演せられたり。次に荻野仲三郎氏は宗教談として宗教の極意は超倫理的なるを說き、自信力の前には善も惡も、毀譽も褒貶も何物をも妨ぐるものなしとて、實例を引き來りて感動を與へられたり。此日婦人の聽講者過半數以上なりき。

▲五月八日（第十六回）　楠龍遣氏は修得佛性と性得佛性との二種あるを說き修得佛性とは自力の修行を積みて佛性を覺る事なれども、之に反して性得佛性とは、本來吾々は佛性を具有して居るものなるを說き、自力の修行は難くして他力の本願は易き所以を述べられたり。次に近角常觀氏は我等は如來の子也として家嚴の示寂によりて大なる教訓を得たりとて、實驗を語られたり、今までは左程未來に重きを置かざりしが始めて宗教の極致は現世に於て理想の極に達すると能はざるを知りたりとて委しく述べられたり、詳細の事は第三號を參看せられたし。此日聽衆頗る多く樣に溢るゝを見る。

▲五月十五日（第十七回）　曉烏敏氏は別離の苦悶に就て、凡そ佛教には八苦あり即ち生、老、病、死、愛別離苦、怨憎得苦、求不得苦、五蘊我成是也。初めの四苦は生あればこれ、老あり、病あり、死あり、故に此四苦は生に收まる也。後の四苦は五蘊假和合により此身を成ずるなり、故に此身ありて始めて哀別離苦等の苦が生ずる也。而して今いふ所の別離の苦悶に就て二分するを得べし、一は精神的の別離、二は肉体的の別離なりとす。世は無常也、人生は露の如し、會者定離、愛別離苦、これ世の實相也、別離は遂に避くべからず、されども別離の苦悶は慰せらるべし、たゞ如來によりて慰せらるべきを語られたり。次に近角常觀氏は眞如法性の意義に就て、眞如法性とは天地の理体にもあらず、宇宙の妙用にもあらず、將た哲學的の本体にもあらず、眞如、法性とはたゞ此肉体をすてゝ始めて靈なる彼土に於て悟り得たる境界を名くべきもの也。嘆異鈔に彌陀の願船に乘して生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黑雲はやくはれ法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無碍の光明と一味にして一切の衆生を利益せんときにこうさとりにてはうらへ。と、親鸞聖人は眞如法性の主義を明了に發揮せられたり。吾等は此世に於て多少の善をなしたりとて、したり顏して慈善などゞ名くべきものにあらず。此世はよろづのこと皆以てうらごと、たはごとまことあることなし。たゞ念佛のみぞまことなりとて、これも嘆異鈔をひきて述べられたり、此日も聽衆多かりき。

▲五月二十二日（第十八回）　曾我量深氏は鄙匠の話を述べられたり、むかし支那に鄙匠と云はるゝ巧みなる大工がありしが、一日或人が鼻の尖に泥が付きしを、鄙匠斧を振り上けて鼻を傷けず、少しの泥をも止めず、巧に拭ひ去りしと云ふ。後ち再び之を試みむことを迫まりしも鄙匠固く辭す。爾らば汝の腕鈍れるや、鄙匠曰く然らず、我が手腕を信ずるものなきゆゑ我は斧を下すに由なしと云はれしとの事莊子に見えたり。思ふに我等はたゞ如來を信ずるのみである、さらば我等は救はるゝ也。利劍即是彌陀名號、彌陀の利劍によりて我等無明の鼻尖の泥は何の苦もなく切り落さるる所以を詳說せられたり。次に近角常觀氏は無碍の一道に就て語られたり、天神地祇も敬伏し、寰界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなき故に無碍の一道なりとの嘆異鈔の意味をば法を求むる人には何事も障碍することなき所以を手強く敷演せられたり。此日も聽衆多くして溢るゝ計りなりき。

◎談話會（第四回）　二十六日講話後引續催されぬ。二三の人々が本日の講話に就て疑問を質たされ、彼れ問ひ我答へて正午散會したり。出席者頗る多かりき。

◎女子部談話會　は去る十五日午後二時より開かれたり。例によりて各自の所感を述べられ、且つ質問などありて、著しく向上の路に進みたるを見受けぬ。會者二十二三名にして前會より盛會なりき。

▲五月廿九日（第十九回）　楠龍遣氏は人生の二途に就て、曰く人生には宗教を要するものと、要せざるものとの二途あり。然れども之を實際に考察し來れば宗教なき人は、如何なる英雄にても、また豪傑にても中心欠陷を感ずることなきや、秀吉の如き豪傑にありても。死するに臨みては、過去を回顧し來れば一場の夢の如しと嘆ずたるにあらずや。近頃物故したる大哲學者たるスペンサーの如きも

尙未だ材料の不足を嘆ずたるにあらずや。學問と難、文藝と難、其他一切として中心の欠陷を感ぜざるはなし。而して之を補ふものは即ち宗教也。宗教は富める人貧しき人、學問ある人、無き人、豪傑の士に至るまで是等の欠陷を補ふて、心中一の不平なく煩悶なからしむるもの也。これ即ち宗教の力なる所以を說かれたり。次に近角常觀氏は權化の說に就て從來の人には權化と云へば眞實ならざるものを指したるものゝ如く思ひしが、然れども釋尊一代の說敎八万四千の法門皆權化ならざるはなし。權化と云へばとて強ち眞實に對して云ひたるにあらず。されば末燈抄に佛になりたまへる佛菩薩のかりにさまざまの形をあらはしてすゝめたまふがゆへに權といふ也と。此意を味ふて始めて權化の說が明了となる事を一時間餘語られたり。散會せしは正午前なりき。

○第二求道會講話錄

四月三十日　第廿回　上杉文秀氏出席

○講題　修養論

○大意　本日は自己の經驗を談ずるよりも寧ろ古の高僧の修養の實驗を味ふも蓋し裨益する處多かるべしとて、我國の高僧傳敎大師の師なる支那の天台大師の摩訶止觀に記述せられたる廿五個條の修養論を引きて談せらる、尙此各個條は何れも大師が嚴肅なる實驗修養にして、一として輕視すべきものあらず、然れども數ならぬ我等にありては此の一々が實行せん事到底望むべくもあらず、唯我等は深く此諸個條の中心たる處を察し得て謹愼修養以て歩々向上の一路を追ふて進むべきなり、而して此諸個條の中心點は克己にあり克己は實に我等修養の眞摯なりと、左に其廿五個條を擧ぐべし、

一、持戒清淨（規律）
二、衣食具定（資料）
三、居處閑靜（五緣を具す）
四、息諸絲務（挑雜事）
五、近善知識（師友）
六、色
七、聲
八、香
九、味
十、觸（五欲を呵す）
十一、貪欲
十二、瞋恚
十三、睡眠
十四、掉悔（五蓋を棄てて）
十五、疑
廿一、希望
廿二、忍耐
廿三、思念（五事を行ふ）
廿四、觀察
廿五、決斷
十六、心
十七、身
十八、息
十九、眠
二十、食（五事を調ふ）

五月七日　第廿一回　近角常觀氏出席

○講題　軍國に於ける修養問題

○大意　今や我國か露國と戈を交ふるに至てや、朝に國家常ならさる秋に當りては又常ならざる事情ありて起る、是實に國民の修養を促す好個の問題に非や、抑も露探の風說起れは國民は狼狽或は是あらんを憂ひ、又一度勸險貯蓄唱道せらるあれば苦皇之れに從ひ、爲に消費に於ては減ずる處あるも產品は大に奏捷するに至れり、これを以て今日は又一方に反對說起るに至るや又之れに傾聽せんとす、これ全く國民に修養乏しく、自信なきに據る。是を以て我等宗教の信者たるものは大に是等の問題に留意し修養し、問題起るに從ひて益自信を强固にし、大國民たるの基礎を建設すべきなりと

五月十四日　第廿二回　近角常觀氏出席

○講題　園林遊戲の眞趣味

○大意　近來信仰上最も感想を深くし來るものは實に吾人が未來永遠の樂果を獲得するにある是なり、益し信仰の極致は其根底をこの現世にのみ置くが如き淺薄纖弱なるものに非ずかの吾人の死後無量壽無量光の證果を得て再びこの人間界に來り如來不可思議の威神力によりて苦惱の人を救濟すると言ふ確信をこれ云ふなり、淨土論の五功德門の第五門即ち園林遊戲の眞の趣味に至り始めて何事も思ふ樣になる、親鸞聖人の確信は實にこの第五園林遊戲の極致に心みすえて其感想より湧き出ずるものが言葉となり又行ひとなりし事を吾人は忘るべからず來聽者十五名

五月廿一日　第廿三回　近角常觀氏出席

○講題　光に觸るゝ者は安慰を得

○大意　近頃は殊に求道の士に接する事多く、又眞實に安慰を得られし人も深く感ずるものありとて曉近の實例を示され、而して先生自の實驗上より信仰は他なし唯只直接に光に接觸するにある事を說き、先生か求道者に對して談話せられし趣を逐一談せらる、委しくは本號記載の日曜講話を御覽あるべし當日來聽者四十六名

編輯餘錄

◎宗敎家大會は去月十六日芝公園彌生館に開會、左の宣言書を滿場拍子の裡に可決致され候。

日露の交戰は日本帝國の安全と東洋永遠の平和とを盡し、世界の文明正義人道のために起れるものにして、毫も宗敎の別人種の同異に關するところなし、故に吾儕宗敎家は宗派人種の異同を問はず、竝に相會し、各自正正の信念に愬へ相共に誓つて此交戰の眞相を宇內に表明し、以て速に光榮ある平和の克復を見むことを望む、右決議して中外に宣言す。

右終ると共にそれ〴〵諸大家の演說もありて、無事散會を告げ候。當日の出席者は無慮千餘名に上り頗る盛會に候ひさ。左に少しく記者の雜觀二三を揭げ可申候。

（一）宗敎家大會に就ては種々の噂さがつたが、今此に彼此と云ふの必要ない。淨土宗の熊田眞洞氏が會開の辭を述ぶるに當り、此の宗敎大會は其筋の命を受けたものでないことを辯護したが、何となく妙に感ぜられた。

（二）當日の演說は耳を傾くべきもの甚少なかつた、たゞ尼崎市長の演說のみ、簡にして要を得た。曰く。言や美なり、行の之に副はんことを望むと。滿場の喝采急霰の如きであつた。

（三）青龍居士の燕尾服は人の視線をひいた、居士の宣言書の代讀は音吐朗々人をして醉はしむるの寬力あるやうに感じた。此時滿場水を打つた如く森として靜まり返へた。

（四）千家知事の祝辭は勤儉の說にまで說き及んだ。人皆啞然。

（五）宗敎大會の前觸が大なるにも拘らず、さて列席して見ると甚た失望らしく感じた。自ら何の故たるを知らぬ。

◎宗敎大會も催され、彼理紀念彰誼會も催され候。云ふまでもなく米國政府の厚誼を尊重する趣旨に出て候。ペルリーの浦賀に來りて邦人の長き夢をさましたるよりすでに五十年。顧みて今昔の感に不堪候。

◎大谷派の新法主は越佐の巡化を了へて本月十八九日頃歸京さるゝ由に候。

◎大日本佛敎青年會の夏期講習會は、例年地方有緣の勝地を選びて二週開會して法味を愛樂し來たりしが、今年は方針を變へて東京にて七月上旬より十日間開催することに決定し、目下會場選定中の由。最も講師の如きも極はめて少數に定めたる由に候。

◎南山の戰我軍の死傷者四千餘名と注せられ候。激戰の狀想ひやられ候。

◎六月一日は求道學舍の紀念日にて、午後一時より一同打ち揃ふて撮影し、佛前にて禮拜を行ひ、近角氏の挨拶ありて後ち晩餐を共にいたし候。小會ながらもなか〳〵趣味深くして平和の泉は盡きせぬ思ひ致し候。此日求道學舍の後庭に紀念として苺を植付候。こゝ年こそ樂みに候。

◎種田淳一、安村曉雲の二君新に入舍致候。

◎近角氏は本月十八日頃名古屋積德會の聘に應して同地へ參り又故鄕に立寄りて嚴父百ケ日を修せらるゝ筈に候。

英國ローレストン氏著　稲葉昌丸先生譯

エピクテタスの教訓

五月三十一日發行
寸珍美本百九十四頁
上製二十七錢
並製二十錢
郵税並製上製共四錢

顧みれば最早一年を經申候**昨年六月六日**思ふも悲しき日に候我等が恩師**清澤滿之**先生は此日を以て我等を罪の世に殘し置きて淨土に歸られ候我等不敏常に我師の教訓の如くなる能はずと雖先師が指されたる一閃の靈光は常に我等の上に働き給ひて我等に力と命とを與へ給ふ。此の高恩何を以て報ぜんや今度先師第一周忌を營むに當り一には先師の靈前に捧ぐる爲に一には先師の志を世に爲さんか爲めに先師が**西洋第一の書**として愛讀し給ひたる書『エピクテタスの教訓』を先師第一の親友たりし稲葉昌丸先生に飜譯の勢を乞ひ茲に『精神界』の臨時增刊として道友に頒つ

秀存百話

佐々木月樵　編

一部十錢　郵税二錢

施本用

曉烏敏氏著

死の問題

六月五日發行
寸珍美本百六十四頁
定價一部二十錢
郵税一部四錢

如何なる人も一度は通過せざる可らざるは死の門也如何なる人も之に會して戰慄するは死の怪物也ソクラテス曰く哲學者は死を研究すべしと。豈夫哲學者のみならんや佛教の信念とは要するに死の問題の解のみ。本書を記して神秘の扉を開けり求道者の一讀を乞ふ

軍人之宗教

曉烏敏　著

一部五錢　百部三圓　千部二十圓

施本用

發行所　東京本郷區曙町一六　浩々洞　◎　東京本郷四丁目　文明堂

●大好評△旬日を出てしず版數を重ね

出征在郷軍人への餞別用書

戰時佛教施本適當書類

武裝法施本適當の實既刊書目

●戰爭と佛教　大須賀秀道師著　第三版
●死の覺悟　同師著　第二版
●大和魂と佛教　同師著　最新刊
●遺族の慰め　出征憲雄師著　野田　最新刊
●勝利の宗教　日野　河崎顯了師著　最新刊
●勤儉と佛教　第二版
●信心のすゝめ　仁科幽谿君著　戰時　最新刊　各定價壹錢　郵税五厘冊數により割引なし
●戰爭用心　山口葉千代兩君合著　念佛行者　河崎顯了師著　第二版
●戰時の國民　仁科幽谿君著　新刊
●戰時の心得（附錄勝利の歌）　佛教信徒　中村知照君著　新刊
●念佛軍人　岩井智海師著　日清戰爭　第三版
●佛教演說筆記　日露戰爭　日野公任師著　第三版
●御垂示演說　大谷法主　各定價壹錢　郵税八冊に付拾五錢　陸軍少將　小島政利君題辭　第二版
●軍人龜鑑　定價貳錢　郵税五冊に付貳錢　第二版

一佛教施本は軍氣振興策の最上なり

戰時　第一篇　法藏館編
●戰爭法話　第二篇　第三篇　第四篇　法藏館
●軍國布教資料　第二篇　河崎顯了師著
●戰時佛教演說　第四篇　田淵禪緣師著
●軍國朝家と念佛　布教
教材　每篇定價一部二十錢　郵税四錢
●初版將品切とならんとす　急注文あるべし

發行所　東京都市武東五　東京電話武六八修番　法藏館

●奮起せよ△千載一遇の布教好機を逸する勿れ

院鳥敏氏評序　楠龍造氏著

他力宗教論

四六二百六十頁　並製三十五錢　税四錢
上製五十錢　税六錢

本書要目

他力信仰は宗教の極致なり。

◎一切の門戸は他力信仰に達す◎常識と他力信仰◎倫理と他力信仰◎他力の啓示到る所にあり◎智識と他力信仰◎苦樂と他力信仰◎他力の本願◎他力の三信◎他力の名號◎他力の行信◎他力教の佛陀佛國◎他力教の現世生涯◎他力教の發展◎他力教の地位及使命◎鎌倉時代の親鸞聖人

法然親鸞二師の比較

◎親鸞聖人と使徒保羅◎阿闍世王論◎韋提希夫人◎信仰行程の三譬喩◎日本文學上に於ける他力教思想◎薄伽梵歌の他力宗教等

文學士　清澤滿之氏著

精神講話　第四版

△四六版二百頁　△正價金三十錢　△郵税金四錢

醫士　坂田實氏著

健腦法　新刊

△寸珍美本　△價十五錢税二錢

文學博士　南條文雄氏　舟橋水哉氏著

大乘佛教史論

菊版二百五十頁　△並製五十錢　税八錢
△上製六十錢　税十錢

萬朝報の批評に曰く

南北佛教等しく之れ佛陀の教理なり然るに學者北方佛教の研究を爲すもの多くして南方佛教即ち小乘教を措て顧みざるは何ぞや歐洲の學者は原始佛教は寧ろ南方に在りとし夙に之が研究に從事し既に原文の經典に通曉し之を翻譯し或は之が註解を試みたるものすらあり本邦に擴布せる佛教は大乘教のみにして其の小乘教と云へるは僅かに律宗の一派あるのみなれば學者の一顧を得ざる之が爲乎著者深く之を遺憾とし多年の研究を經て本書を公にせり全篇十二章最も世親の研究に重きを措けり小乘の原始は佛陀に在りと雖も之を大成したるは世親なれば也故に之を一部の世親傳と云ふも不可なきに似たり世若し南方佛教を知らんと欲せば一たび本書を繙く可し本書實に其の好津梁たる可し

文學博士　前田慧雲氏著

大乘佛教史論　第三版

△菊版三百二十頁　△並製七十錢　税八錢　△上製九十錢　税十錢

教界偉人叢書第一編　境野哲氏著

聖德太子傳　最新版

△菊版二百一十頁餘　△並製四十五錢　税八錢　△上製六十錢　税十錢

發行所　東京本郷下谷二丁目四番地（電話二〇二九番）　文明堂　同　京都西六條市　興教書院

文學士　近角常觀氏著　好評第二版

信仰問題

△菊版二百五十頁　並製五十錢　税八錢
△寫眞數十葉　上製六十五錢　税十錢

東京日々新聞批評

著者近角文學士は近時佛教界の秀才として氣燄家として頭角を現はせる人、歐米に遊ぶこと多年遍く世界宗教の趨勢を察して本書を著はせり

其說內篇、外篇に分ち內篇に於ては實驗の宗教、哲學の研究が佛教信念の消長に與へし害毒、倫理問題の解決如何社會に於ける內的制裁力の養成、學生間に於ける信仰の勃興、活ける讀書と淸新なる信仰、信仰と苦悶、修養論、外篇に於て宗教問題解決の要點、英國又其宗教界、宗教形式の變遷、佛教の見地に立ちて社會問題を解決す、社會の根底的改造、歐米各國に於ける宗教の特色、宗教的經營及社會事業を論す

引證該博、識見高邁而も空疎ならず、近時佛教界の一大著と云ふに躊躇せず

文學博士　井上哲次郎氏著

釋迦牟尼傳　第十一版　並製六十錢　税八錢　上製八十錢　税八錢

教界偉人叢書第二編　小野藤太氏著

弘法大師傳　最新版　並製四十五錢　税八錢　上製六十錢　税十錢

佐々木月樵氏新著　好評第三版

實驗の宗教

△菊版三百二十頁　並製四十五錢　税八錢
△惣四號活字　上製六十錢　税十錢

國民新聞批評

本書は、我國宗教的偉人のあとをたづねて、適切に、實踐修養の大義を唱道し、それに由つて著者が人格の感化をうけたる實感の記載なり、或は警め或は怒り或は罵る　議論の壯雄なることは語り、或は督へ　趣味津々盡るこなきは、カーライルの『英雄論』に似たり、エマルソンの『偉人論』に類す　今や、理論的宗教の時代は已にすぎ去つて「實驗之宗教書」出づ　崇高なる人格に接して　信念を得　修養に資せんと欲する人々は、是非一讀再讀を要す　而して本書には我國に於ける宗教的偉人の正確なる詳傳なるも併せ錄せり

文學士　高瀨武次郎氏著

王陽明詳傳　最新版　菊版三百八十頁　正價八十錢　税十錢

文學博士　井上圓了氏著述

佛教通觀　近刊　全二冊　上卷六十錢　税四錢　下卷三十錢　税四錢

發行元　東京本郷下谷二丁目四番地（電話二〇二九番）　文明堂　同　京都西六條市　興教書院

小河岳洋先生戯著

短編刑事小説

根なし草

全

定價金十六錢　郵税金四錢

本書、收むる所、「危機一髪」及び「監獄未來の夢物語」の二編あり、前編は筋を明治初年に於ける花も實もある老官吏の聽訟談に起し少壯新進の學士と問熟先進の法官との對話に藉りて執法變通の妙理を說き、黄吻と老舌、美人と酷吏、對照波瀾の間に備さに世態人情の細微を穿ち、口を極めて微非撿舉の弊竇を痛論し結局、世の法律なる所のものも溫かき血と涙の同情的活動を以て機宜變通する所なかるへからさる所以の理由に論及せられたるもの、後編は名は未來記と謂ふと雖も大体或る文明國に於ける現實の事實を根據として之を潤色するに「そんじよそこら」に隱現出役せる幽靈の如く將た幻覺の如き似而非的博愛主義、感化主義、さては懲戒主義に伴ふ怪しの現象材料を以てし、滑稽あり眞面目あり、變化縱横、奇想新案湧くが如く諷刺の切なるに怒れるの後には忽ちにしてまた喜劇の妙なるに抱腹絶倒するの想ひあらん、若し夫れ黑人眼を以て之を一讀せば一言一句、すべて其心を相感應して悉く活動飛躍するの感あらしむべきを疑はず、先生行餘の閒筆之を公けにすること固とより其素志に非すと雖も敢て請ふて之を刷行するの許諾を得たり、印刷部數に限りあるが故に本書希望の向は成るへく速かに御申込あらんことを望む

東京市麹町區飯田町五丁目三十二番地

注文申込所　宮下釼太郎

爲換振込　神田一ッ橋通郵便受取所

明治三十七年五月廿一日印刷
明治三十七年六月一日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（電話下谷二四三二）

東京市神田區神保町

大賣捌所　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂
同

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

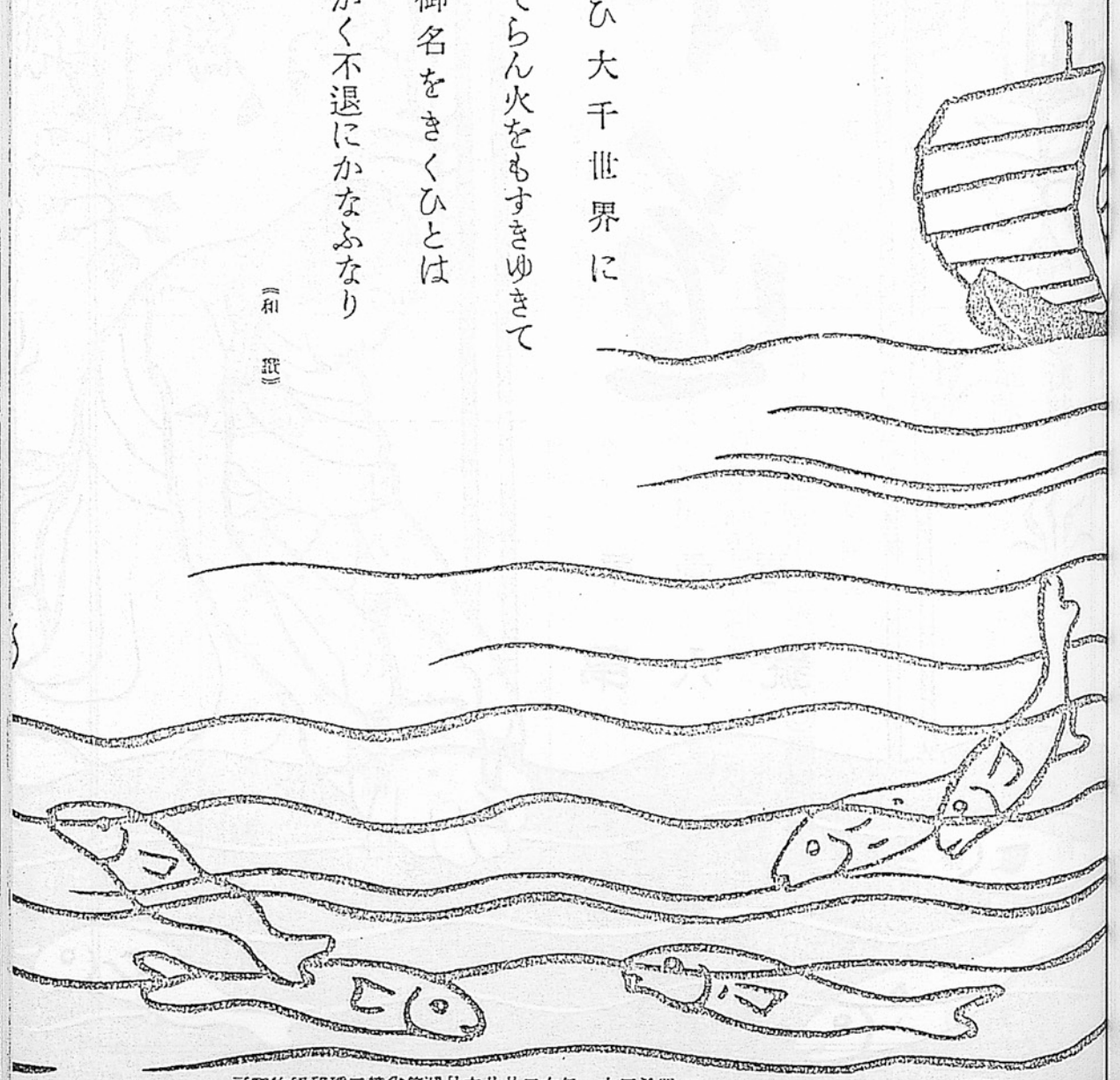
一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

廣告料五號活字一行）二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

たとひ大千世界に
みてらん火をもすきゆきて
佛の御名をきくひとは
なかく不退にかなふなり

（和讃）



明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
求道第五號